

「湘南科学史懇話会」連続懇談：第1回（2006. 5. 7 於：藤沢産業センター）

いいだもも著『〈主体〉の世界遍歴』全3巻（藤原書店）をめぐって

演題：「今日における主体の危機と主体再生の展望について—メル

ロ・ポンティ、ミッシェル・フーコー、ポール・ネグリの提起」

□パネラー：

片桐薫

針生一郎

□リプライ講演：

いいだもも

□司会（問題提起）

猪野修治

猪野修治 連休の最後の日に、皆さん、遠い所をありがとうございました。そもそも湘南科学史懇話会とはどういう会なのか、何者がやっているのかということ、ちょっと申し上げます。

この会は、私が関心のある講師の方をお呼びして勉強したい、と同時に地元の藤沢市民の皆さんとともに勉強したいという思いから始めました。1998年5月に第1回目の懇話会を開きまして、今回で45回目、9年目に入ります。これまでやってこられたのも皆さんのご支援のおかげです。とかく東京がメインの舞台になりがちですけれども、ここ藤沢を根拠地として皆さんとともに学問や政治運動を展開することにこだわっていきたいと思っております。

いいださんのお名前は皆さんご存じかと思えます。カッシーラーというドイツのユダヤ系の哲学者は、ナチスの迫害を逃れて亡命し、晩年はニューヨークに行きそこで亡くなりましたが、カッシーラーがニューヨークにいるというだけで、アメリカの哲学界が緊張したという有名な話がありますが、私は大和市に住んでおりまして、藤沢市周辺をうろろうろしておりますけれども、常に藤沢にはいいだももがいるということを意識していました。遠い存在でしたが、私がいいださんと初めてお会いしたのは1972年、物理学者の梅林宏道さんがやっておられたた米軍基地反対闘争でだったと思えます。そのころ一度講演をお聞きしたことがございますが、その後ご縁があって、数年前にいいださんに講演をお願いいたしました。

私自身はアカデミズム批判、つまり大学人批判をやっております、2、3年前からギリ

シアの哲学者プラトンの書物を素人なりに読んでいたのですが、その矢先にいいださんの“枕本”3巻が刊行されました。在野の一思想家が、ギリシア哲学に遡って21世紀をどう見るかという壮大な試みをされておりまして、それで私はこの本をテキストにするしかないと思ひ立ち、このところずっと苦みの読書が続けていたのですが、皆さんご承知ようにこれはそんなに簡単に読めるものではございません。

そうこうするうち、作家の入江曜子さんが組織されて、2月26日に江ノ島の岩本楼で地元の方々を中心に「出版を祝う会」が開かれました。そこに出席させていただいた折りにこの本の読書会をしようと提案いたしまして、これは4回くらいやらないとわからないなあと思ひまして、それでこの連続懇談会を設けたしだいです。たいへん恐縮ですけれども、ぜひ皆さん4回ともご参加いただきたいと思ひます。この本はたいへん難しいので、いいださんの思想を平たくわかりやすくお聞きしたいというのが私の本音でして、知のあり方を一般の人にもっと解放してほしいと思ひます。どうぞよろしくお願ひいたします。

始める前にもうひとつ、ここ藤沢の地でステラ研究所を主催しておられる新戸雅章さんから事務的な連絡をお願いいたします。

新戸雅章 新戸と申します。お配りしたチラシをご覧になっていただければおわかりになると思ひますので、のちほど懇談会のときにでもお話しさせていただきます。

猪野修治 私がこの連続懇談会をやるきっかけを実質的につくってくださった入江先生、一言お願ひいたします。

入江曜子 入江曜子です。先ほど（「出版を祝う会」を）私が主催したとおっしゃいましたが、実は私はこの会では雇われマダムでして、主催なさったのは「釣飲会」といって、片瀬江ノ島で釣りをして飲むというグループです。いいださんもそのメンバーの一人です。その会の人たちが、この本は（難しくても）とても読めないで、いいださんを中心にして楽しみながらその読み方のノウハウをうかがおうではないかというところから、どうも始まったようです。メンバーがみな男性なものですから、私が司会を仰せつかってしまいました。

最初はそんなに大きな会になると思わなかったんですが、当日は雨と嵐のたいへんな日だったにもかかわらず、86人という大勢の方たちがお集まりになりました。これはやはりいいださんの人脈の広さによるもので、たくさんの人にお話をお聞きしたいので、20人くらいの方に5分ずつスピーチをお願いしたのですが、それはいいださんに対する多種多様な期待の表明だったと思ひます。暗く出先の見えない、思想にしても政治にしてもどこへ漂流してしまうのかわからない世の中に、1本の灯台として、私のイメージとしては江ノ島の灯台なのですが、江ノ島の灯台の光が日本の暗黒を照らす新しい光になる、と同時に、いいださんが発するこの大著が持っている光だけではなくて、それに私たち一人一人がそ

れぞれに持っている光を添えていくことで、世界を変える原動力になりはしないかという、たいへん厚かましくもおこがましい期待を込めながらの盛会でございました。

これから4回にわたって、この有意義な研究会がある。私も毎回出席して勉強させていただきたいと思います。僭越ですが一言申し上げました。

猪野修治 ありがとうございます。今日はまず片桐薫さんと針生一郎さんにこの本に関するコメントをいただきたいと思います。ご存知のように片桐さんはグラムシ研究者であり、藤沢の図書館にも勤務され地元にも縁のある方です。針生さんは、文学・美術評論、新日本文学の編集長とさまざまなご活躍をされております。お二人に30分ずつ講演していただいて、そのあといいださんからリプライ講演を90分していただく予定です。最後に会場からの発言と討論とさせていただきます。

いいだも 『〈主体〉の世界遍歴』 を読んで

片桐 薫

1 年齢、仕事、気概

最近、自分の年齢のせいもあってか、高齢で目立った仕事をした人々とその気概が、たいそう気になるようになりました。いいださんたちの機関紙『未来』への寄稿「いいだも 『〈主体〉の世界遍歴』—私はこう読む」でもふれましたが、幕末から明治・大正を生きた最後の文人画家富岡鉄齋は、当時の「知識人」のほとんどが西洋文明へとなびいていくなかで、それに見向きすることなく、漢学や国学を学んで学者として生涯（88歳）をおくりました。私の興味をひくのは画家としての鉄齋で、南画や大和絵などを広く吸収し、また書もよくしました。それは60歳頃から目立ちはじめ、70歳半ばにはその線はいつそう力強さをまし、80歳代の最晩年になってもその筆勢は衰えるどころか、ますますさえ、画境を一段と深めていき、「万卷の書を読み、千里の道を行くは、古来文人画家の理想なり」と喝破しました。

今日はもうひとり、「赤富士」や「神奈川沖波裏」などで知られる江戸後期の浮世絵画家、葛飾北斎にふれたいと思います。彼の生涯は刻苦精励の連続で、73歳の「富岳三十六景」で名声を決定的なものとししました。それは広く親しまれていた富士をまったく新しい視点でとらえ、従来の浮世絵の江戸という枠を超える芸術でした。ところが、それを追いかけるように37歳年下の安藤広重が「東海道五十三次」を発表し、浮世絵による風景画の競作時代が始まりました。しかし北斎の造形的な厳しい景観に対し、広重の詩的情趣に満ちた

景観に人気が集まり、北斎は心中おだやかでなかったと推察します。それ以上に北斎の心を満していなかったのは、浮世絵における版元での絵師・彫り師・摺り師による製作過程や限定された大きさの画面でした。「富岳百景」を発表した後、ようやく鳥獣の骨格を悟るようになったと自認する頃、こう書いています。

「八十歳にして益々進み、九十歳にしてなおその奥義を極め、一百歳にして正に神妙ならんか、百有十歳にしては一点一格生くるが如くあらん。願わくば長寿の君子、予が言の妄ならざるを見給うべし」(76歳)

彼はその後、肉筆画による天井画や屏風絵に新境地を開拓していきました。その多くは海外に流出し、とくにボストン美術館に収蔵されて、長い間、門外不出とされてきました。その価値がこの十年ほどの調査で明らかになり、目下、神戸市立博物館で公開されています。なかでも北斎の「鳳凰図屏風」は、金を主体とした背景に赤、緑、青の鮮やかな鳳凰が豪快に屏風から飛び立たんばかりに描かれており、先の彼の言葉はけっしてはったりではなかったことを示しています。

私がここで申し上げたいのは、年老いてから大きな仕事をする人は、いずれも余人の及ばない「気概」があったということで、大著をものされたいいさんの「気概」を今回の「連続懇談会」でうかがうことができるのを楽しみにしています。

2 歴史を書くということ＝「歴史とはつねに現代である」

先に申しました『未来』への寄稿でも、何人かの歴史家を並べましたが、ここでは、司馬遷『史記』、N. マキアヴェッリ『ローマ史論』『君主論』、そしていいさんの『〈主体〉の世界遍歴』を考えてみたいと思います。

ご承知のように、司馬遷(前145～86頃)は前漢時代の人で、歴史家である父の遺志を継いで通史の編纂に従事していました。たまたま漢の將軍李陵が匈奴と戦って敗れ、捕虜となる事件が起きました。李陵の処分を決める席上、李一家皆殺しの意見が大勢を占めるなか、独り司馬遷は將軍の忠節と勇猛をたたえ弁護したため、武帝の怒りをもって宮刑に処せられ、投獄されたのです。数年後、出獄、復官し、宮刑という辱めにも屈せず、『史記』130巻を完成しました。そこで紀伝体という新しい歴史記述の方法(列伝)、つまり事実の正確な検討を通じた総合的な価値判断による人間の歴史学を確立しました。いいさんもこの本で書いているように、司馬遷にとって「史」とは志であり、詩であり、誌(記録)であり、歴史に対する情熱だったのです。

ご承知のように、マキアヴェッリ(1469～1527)は後期ルネサンスの人で、フィレンツェ共和政庁の書記官に採用され、その後、外交問題や軍事を取り扱う「10人委員会」の秘書官として活躍しました。しかしその共和政体が倒れ、彼は14年間勤めた地位を免職になり、さらに新体制への陰謀のかどで投獄、拷問のすえ釈放され、フィレンツェ郊外の山荘に家族とともに閉じこもることとなりました。以後、かねてから感銘を受けていた古代ロ

一マの歴史家ティトウ・リヴィウス『ローマ史』（140巻）を読み、ローマ共和政時代の諸事実と自ら経験したルネサンスの政治とを重ね合わせながら、『ローマ史論（政略論）』の著作に専念し、またそれを中断して『君主論』などを書きました。それは16世紀の天文学におけるガリレイと同様、政治を教えられたとおりの理想像によってではなく、あるがままの姿に描くことを選びました。つまり倫理的政治観を打破して、現実的な近代政治思想を確立したのです。

さて、いいだもさんの『〈主体〉の世界遍歴』の特徴です。私はごく大雑把に以下のように読みました。①人類文明史・人類精神史の根本的吟味という基本路線にたって、ヘーゲルのヨーロッパ中心主義史観の呪縛から脱却し、マルクスの世界史論に欠けていたものを補うことによって、歴史の複合的・重層的な場における主体的胎動をさぐること。②現代哲学の核心的課題としての言語批判＝言語哲学を、21世紀へと向かう現代思想の主眼として提起し、しかもそこでヴィトゲンシュタイン（永遠の沈黙）vsメルロ・ポンティ（見えざる世界の探求）の対比を主軸に、現代哲学の根底にあるものをさぐること。しかもヴィトゲンシュタインの「沈黙」と釈迦牟尼の「黙寂」、および「フラクタルな混沌」と「荘子の混沌」との対比によって、東西文明の比較・対照することであり、その視線は、東大寺正倉院にまでおよぶ。

もちろん、この三者の歴史著述における対象および目標は異なりますが、共通するのは、現実の政治において不遇だったことであり、それをバネにして「仕事」に取り組み、そして古代の歴史に学びながら、それぞれの時代状況への示唆を学び取ろうとしている点だと考えます。

3 歴史と人間における人間精神の主体的能動性の尊重

先に見たマキアヴェッリ『君主論』『ローマ史論』には、〈fortunato（宿命、運）〉〈virtu（力量、徳）〉という言葉がひんぱんに登場しますが、それは彼の歴史観・政治観を表現する二項式となっています。つまり、歴史というものは神の意に左右されるとされてきたキリスト教的史観を捨てて、君主に成功の機会を与えたり奪ったりするのは、「運命」によることが多いと見たのです。同時に、「運命」そのものも人間の習慣や意思や徳に左右されうるとして、「神聖史観」を世俗的歴史のレベルに引き下げて考え、古代ギリシア人が信じていたような絶対的運命を否定して、運命を左右するのは人間の意思、能力だと信じてきました。

こうした近代政治思想のいわば開祖であるマキアヴェッリを、現代政治思想の立場からとらえたのが、アントニオ・グラムシでした。彼はマキアヴェッリの〈運命、宿命〉と〈力量、徳〉といった言葉を、〈知の悲観主義〉と〈意志の楽観主義〉という表現で置き換えました。グラムシにとって、獄中における二重・三重の孤独の重圧と絶望的に悪化していく健康状態に耐えながら、自らの思想的・理論的錬成を続けることは、強靱な意思の力に

よってはじめて可能だったのです。「客観的に与えられているものを主観的たらしめること」を目指していた彼の思想と行動の最終目標は、「意志の楽観主義」、つまり「主体の奪還」でした。

いいださんはこの本で、グラムシの「知の悲観主義、意志の楽観主義」を念頭に、〈主体〉の問題と関連して「認識のペシミズムと行動のオプティミズム」（21頁）と表現しています。しかも注目したいのは、本書の書き出しで、「21世紀は希望の世紀か？ しかり、希望の世紀だ。21世紀は希望の世紀でなければならない。私たちがそうしなければならない」と強調していることです。いいださんは、しばしば誤って指摘されるような「世紀末論者」ではないことを、この表現で、しかもこの大著で示している、と私は考えます。

以上のような三者の表現を、私の言葉でいいかえると、「歴史は線路の上を走るように、あらかじめ決められた未来に向かって進むわけではない。そこには人間の力が入り込む余地もまたある」ということであり、それは人間精神の主体的能動性の問題だと考えます。

最後に、我田引水的で恐縮ですが、質問します。先に述べたように、いいださんは「ヴィトゲンシュタイン（永遠の沈黙）vsメルロ・ポンティ（見えざる世界の探求）」という構図で論じていますが、ヴィトゲンシュタインとズラッファおよびグラムシとの関係については「第6章」の「3 転換の禅機——ズラッファ」と「4 ピエロ・ズラッファとアントニオ・グラムシ」で言及されるだけで、詳しくは『ポスト・モダン思想の解読』（社会評論社）に譲っています。

そうしたうえに、質問の第一は、P. ズラッファのヴィトゲンシュタインへの協力をどう見るかという問題です。ケンブリッジ大学で、9歳上の哲学者ヴィトゲンシュタインと経済学者ズラッファを結びつけたものは、ともに招聘外国人教員で、ともにユダヤ系の血をひく関係だったと推定します。しかも、ヴィトゲンシュタインの『論稿』を題材に毎週木曜日に長期間（1946年まで）にわたって論議を交わただけでなく、1938年、ナチ・ドイツがヴィトゲンシュタインの母国オーストリアを併合し、ヒトラーがウィーンに凱旋示威行進入したとき、帰国すべきかどうかで迷った政治音痴のヴィトゲンシュタインから、助言を求められたズラッファは、きわめて適切な助言をしています。いいださんはこうした事実をどう見るか、うかがいたい。

もう一つの質問は、グラムシの最後の「ノート」29「文法研究入門のための覚え書き」に関連してです。この「ノート」29には、短い数本の覚え書きがふくまれているが、それは、名指しこそしていないが、ズラッファを介して聞いたグラムシのヴィトゲンシュタインの「言語ゲーム」＝「独我論」的への批判だったというのが、わたしの〈仮説〉です。つまりグラムシにとって言語問題は、近代国家成立との不可分な関係においてとらえられており、したがって政治およびヘゲモニーとの関わりでとらえられており、それは彼の知識人問題への発想と同様なものだったからです。それと関連していいださんのお考えをうかがいたいのは、こうしたグラムシの言語論とメルロ・ポンティその他の反ヴィトゲンシュ

タイム的立場の諸々の言語論との関係をどう見るかという点です。グラムシの言語論には、ノーム・チョムスキーの「生成文法」やスティーブン・ピンカー『言語を生み出す本能』に見られるような、人間の無意識な領域までには論じいたっていないように、思われるので、その点もいいたさんのお考えをうかがいたい。

* * *

猪野 どうもありがとうございました。グラムシ研究者としての一徹な、これまでの作品に裏付けられたコメントだと思います。私が今まで目にしたこの本の書評では、第I巻のヴィトゲンシュタインに対するいいたさんの痛烈な批判と、メルロ・ポンティ、フッサールについてのお話が大部分でしたけれども、片桐さんのグラムシ研究の視点からその3つに関する質問は非常に的確で、いいたさんのリプライ講演が楽しみです。

いいたさんたちが出しております『未来』という機関紙に、片桐さんが「『〈主体〉の世界遍歴』を私はこう読む」というコメントを書いております。ここに持ってきていますので、この前の「出版を祝う会」に参加されなかった方は、ぜひお読みください。

超枕本は世界の哲学思想の見取り図

針生 一郎

1 ものすごい筆力

いいださんのこの本は、80歳になった記念としてライフワークをまとめられたということですが、「野間宏の会」というのがありまして（私はこの会の幹事をやっております）、この会の相談があって、去年の12月に本の発行元である藤原書店に集まった折りに、藤原良雄社長に聞いたんですね。いいださんのあの歴大な本を、出版社としてはどういうメリットがあって出したのか、どういう層に読ませようと思うのかと。

なにしろ藤原書店というのは、野間宏が『世界』に連載した狭山裁判の記事を、裁判を逐一批判したもので難解で長いせいもあってか、岩波書店がなかなか出さないでいたのを引き受けて、箱入りで3巻本で出して（『完本 狭山裁判』）たちまち売り切ったんです。同じ野間宏の『作家の戦中日記』も売り切った。少人数の出版社ですので、かなり過酷な労働を強いていると思いますけれど（笑）、とにかく売り切るんですよ。そこが非常にえらい。

それで、はっきりとした答えはなかったんですが、社長の話では、いいださんから本の構想を聞いて、かなり読み応えのあるものになるだろうと思って承諾したら、3ヶ月後に大きなダンボール箱いっぱい原稿が届いて、あれにはびっくりしました、と（笑）。あれだけのものを3ヶ月で書いたのか、と。

私も前から藤原書店からそろそろ書き下ろしをと頼まれていたんですが、いいださんの本の話のおかげでそのテーマが決まりました。若干ヴィトゲンシュタインなんかにも関係があります。ウィーンとミュンヘンが源流らしいのですが、スイス東南端のマジョレ湖の北岸に19世紀末から20世紀前半にかけて、対抗文化、つまり自然と最も単純な生活の中からそれと直結した文化・芸術をつくりだすことを唱えて、社会主義者、アナキスト、ユートピアン、オカルティスト、ヌーディスト、フェミニスト、各種の文学者、芸術家が集まって、ヨーロッパで一番大きなコロニーができた。

当時そういうコロニーがいくつかあった。私はその歴史を30年くらい調べ上げてきたんですが、それをいいださんの本に関する質問のついでに、実はこういうテーマがあるんだがといたら、ぜひやりましょう、と。で、どのくらいで書けるのかと藤原良男さんが聞くから、いいださんみたいな筆力はないから、最低半年かかるなあ。それからもう半年経ちそうなんですけれども、まだ買って読んでなかった原書の文献を読んでいる状態で、序章だけ書きました。筆力では段違いの差があるなあ、と思ったしだいです。

2 いいださんの怪物性

いいだももを“怪物”と感じるのは私だけじゃないと思うのですが、その怪物感というのはどこから来るのか。今までのいいださんとの付き合いを少し振り返ってみます。

いいだももという人と知り合ったのは、敗戦直後、1948年です。花田清輝、岡本太郎、野間宏、佐々木基一らがやっていた「夜の会」というのがありまして、月に2回定例会があって、それに参加していた。私は東北大学で国文学をやったんですが、大学として一番だし親にとってもよいのは、東大の大学院に入ることだといって、それを口実に東京に出てきた。下宿が東中野で、「夜の会」の会場だった喫茶店「モナミ」に近いので、常連として出ているうちに、安部公房、関根弘、中田耕治、それから美術家がたくさんいましたけれども、そういう連中と知り合って、彼ら若手常連たちと一緒に「世紀の会」というのをつくった。

東北大学の一年先輩で小川徹という人がいまして、『映画芸術』という雑誌に映画評を書いていて、のちにその経営者になった人ですが、彼があるとき、同じ年頃で『世代』という雑誌を出しているグループがあるから行ってみないかと、その雑誌を出している目黒書店という出版社に私を連れていきました。そこで会ったのが最初だと思います。

そのころ、いいださんは盛んに『世代』に書いていたんですが、飯田桃という本名ではなくて、宮本治という、宮本百合子と太宰治を合わせたペンネーム（笑）でした。それを彼自身はマルクス主義とリベラリズムの二正面作戦とか二重戦略といっていました、そういうつもりで付けたんだ、と。

石原裕次郎がスターになって、彼が主演した映画がいくつも封切られて話題を集めていたころ、私を『世代』グループに引き合わせた小川徹が、『映画芸術』の編集者として「石原裕次郎論」を書けと依頼してきた。だけど私は裕次郎の出演した映画なんてひとつも観てない。すると、映画なんて観てなくていいんだ、と（笑）。やっぱり観なくちゃ書けないと断ったんですが、それがいいださんの方に行ったんですね。それを読むと、彼も裕次郎の映画をたぶんひとつも観ていないことがわかるんです。石原裕次郎というのは単なる刺身のつまというか、出汁みたいなもので、だけどそれでも野球でいえばホームランとまでは行かないまでも、ヒットになるような論文を書くわけです。これはどういう才能なんだろうか、と思ったことがあります。

また、新日本文学会が、共産主義には反対じゃないんだけど、共産党が私物化し支配しようとはばかりするから、逆に対立せざるを得ない状況だったときに、いいださんに文化政策の問題について原稿を頼んだことがあります。私は（新日本文学会の）編集委員でしたが、直接頼んだのは武井昭夫だったと思います。そのころいいださんは結核療養中に患者たちの組織をしていて、共産党に入っているいろんな細胞のキャップをやっていた。それから水戸にも行って、共産党の専従ですかね、梅本克己などの影響を受けながら農民運動にもかなり関わっていた。そういう時期でしたが、いいださんは承知したといって、水戸から東京までの汽車の中で半分くらい書いてしまって、残りを新日本文学会の事務所に来

て、いろんな人と雑談しながら書き上げた。30 枚くらいで、しかもこちらの注文を全部満たすような、適切な論文でした。これまたどういう才能なんだと驚嘆したんですが。

それからだいぶ後になりますが、広島・長崎でアジア文学者広島会議というのをやりました。小田実や伊藤成彦が中心になって組織したものですけれども、私も最初から関わって、寄付金集めやアジアの文学者たちの招聘に協力しました。私がアジア文化作家会議で知っていた人たちを呼んだりしたのですが。そのときはプロの同時通訳のおばさんたちが 5 人くらいで通訳してくれたんですが、雑談中に誰の話がいちばん通訳しにくいかと聞いてみると、口々にいいさんだと言うんです。なぜかという、ものすごく観念的、哲学的な言葉から、とつぜん俗談平話に急降下してくる。かと思うとまた、哲学的なほうに行つて、また降りてくるからだ、と。なるほどそういうものかなと思いました。その点では、今度の本はあまり下世話なほうに降りてこない、思想や論だけを扱っているから、たいへん読みやすいんじゃないでしょうか。

もうひとつ、これは私が東中野に新日本文学館が新しく開館する前に*****に書いたことですが、いま和光大学でカルチュラル・スタディーズやマスコミ論を教えている浅見克彦という人が、当時は北海道大学の助教授か何かで、北海道で彼に会って原稿を頼んだときに聞いた話から思ったことです。

浅見氏がいうには、左翼がよく政府側の情報操作のことをいうけれども、情報操作というのは日本でもアメリカでもあまりない、と。むしろ、イラク戦争の前に、大量破壊兵器を温存しているかどうかの査察をすべきだという国連安保理の決議が何度か出て、実際に査察が行なわれて、その段階でもう、イラクを攻撃していいか、いやもう一度安保理の決議を待って攻撃すべきかという論議が起こった。つまり、現代のマスコミは情報が何者かによって操作されているというよりも、あれかこれかというゲームの構造を必ず抱え込む。だから情報の操作を批判するだけではすまないんだ、というわけです。

『アホでマヌケなアメリカ白人』という本や「華氏 911」という映画で話題になったマイケル・ムーアという人は、「華氏 911」でゴールデン・ラズベリー賞（ラジー賞）を受賞したときに、受賞者の弁で、「恥を知れブッシュ、恥を知れ」とそれだけいって壇上を降りたというエピソードがありますが、あういうふうに、ブーイングも起こるけれども拍手もかなりくるという計算のもとに、あれかこれかと選んでみようとしてみても、選択肢が足りない。一番肝心の、イラクを攻撃しないという選択肢が、そこには抜けている。ゲームの構造に乗っかって遊ぶような恰好で選ぶ場合には、選択肢そのものが揃っていないので、あれかこれかと選択する行為自体が成り立っていないということを突かなければならない、というのが浅見氏の論なんです。

それを受けて思いましたのは、情報の操作そのものがなくなったわけではない。例えば拉致問題ひとつとっても、拉致被害者家族の会の前事務局長の蓮池薫さんが、もう北朝鮮に経済制裁をするしかないという方向にもっていこうとしたことは明らかで、それが情報操作だということとは歴然としている。浅見氏のいうような、ゲームの構造に乗ったうえ

で、その選択肢が足りないということを指摘するような批判の仕方ができるのは、わが（新日本文学会の）会員ではいいだ氏くらいしかいないだろうなと思ひまして。でも、どうもいいださんについては、根はマルクス主義の公式だから、途中でそれが透けて見えるので白けるという声をあちこちで聞くので、マイケル・ムーアほどにはうまく行かないのかもしれないというようなことを、書いた覚えがあります。

3 マルクス主義とリベラリズムの二正面作戦

本の話にもどしますが、さきほどマルクス主義とリベラリズムの二正面作戦の話をしました。その二正面作戦が今度の本にも続いているなというのが、この本の第一の感想です。

最初にこの3冊の本が届いたときの印象としては、「世界の哲学思想の見取り図」としては非常に読みやすいし、恰好の入門書になるなと思ひました。けれど、その見取り図を東西にわたって学ぼうとする人がはたしてどれくらいいるのかな、と。でも読み始めてみたら、見取り図どころじゃないですね。ヴィトゲンシュタインとメルロ・ポンティという20世紀の2人の思想家をとりあげて外史的に論じて、そして現代の問題をかなり克明に取り出しながら、マルクスが論じなかった「8000年の文明史」を論じている。

例えば、ギリシア・ローマがアジアから影響を受けて、それを切り捨てて、というか、それを遮断することによって西洋を、オリエントに対するオクシデントというものの原型をつくりあげたこと。そしてローマ帝国がいかにして崩壊するか。それから、東洋の思想は、宗教に関しては東洋は無神論、正しくは汎神論ですが、直感の把握という点でははるかに優れていると随所に書かれています。

そして現代から遠い古代へ、そしてまた現代へというふうに戻ってきて、全体が円環的な構造になっている。しかもその間に、ヴィトゲンシュタイン、メルロ・ポンティについて、彼らの原典のみならず、それについての研究論文、伝記のようなものを読んで、それを論証する。だから非常に説得力がある。序論風に輪郭だけを述べておいたものを、だんだん深く具体的に解説して、そしてひとつひとつ論証していくわけです。見取り図どころか各論にもなっている。それには感心しました。

そういう点から見て、今度のこの本は、ヴィトゲンシュタインとメルロ・ポンティの対比が見事なものです。ただ、私自身が現象学とソシュールの言語学の影響から出発したとすれば、メルロ・ポンティはたしかに重要なんですけども、私が一番注目しているのはロマン・インガルデン (Roman Ingarden) です。マルクス主義とのつながりという意味でも。インガルデンはポーランドの大学者ですが、私が東大の美学の研究室に6年いて一番感心したのがこの人です。

彼の著作はひとつだけ『文学的芸術作品』という本が、60年代に勁草書房から翻訳されて出ていますが、この本で彼は、芸術作品の構造を伝統的に形式と内容という二元論でと

らえようとするのは不十分だとし、どんな芸術のジャンルでもマテリアルがなければ成立しないのだから、物理的、有機的、心理的、精神的、形而上学的という最低 5 つの層の重層的な構造としてとらえるべきだといっています。そして上の層に行くほど下の層に支えられて自由度が増す。ただこの形而上学的というのは実は世界観なんです、作品ではそれが明確なメッセージとして出される必要はない、気分みたいなものでいい。気分と化した世界観—この分析は非常に見事だと思いました。

フッサールは、自分の正統的な弟子はハイデggerではなくインガルデンだといって、彼を引き立てようとした。しかし私は、研究室にいるときは、インガルデンはポーランド人なので、ナチスの時代にドイツの大学からポーランドに帰ったということしか知らなかった。のちに、ポーランド大使館から送られてくる『ポーランド』という日本語のPR雑誌で、インガルデンはクラクフの大学に帰ってからも、スターリン主義にあくまでも抵抗して、現象学の立場を守り、文学以外のジャンルの芸術作品を講じたこと、また美学、文学、哲学についても書いていること、それからクラクフ周辺にインガルデン学派というものが残ったということを知りました。

それで私は彼の著作を読もうと思ったんですが、ポーランド語は読めないし、ドイツ語か英語に訳された著作もあまり手に入らないので、彼についての研究書をいろいろ調べようと思った。しかし、東大の美学教授から、評論家を続けるならもう美学なんかやる必要はない、と破門されて（笑）、それで私に講師を頼んでくれる大学では美学を講じて、そのためにこの本も読みましたけれども、まだインガルデンのことを書いたことはありません。

ともかく、いいださんのいう「マルクス vs マルクス」というのは、マルクス以後の哲学的諸学の展開をもふまえていて、そしてマルクスが論じなかった原始古代からの、東西の思想と歴史を振り返るといえるのは、これはたいへんなことです。藤原書店のPR誌『機』で、いいださんはこの本を“超枕本”と自称しています。今までも『20世紀の社会主義は何であったのか』や『日本共産党はどこへ行く?』のような厚い本を書かれて枕本と称していますが、枕本というのはすぐには読まれなくてもいいという自覚は多少あるんでしょうね（笑）。だけど枕本といってもお経が書いてあるわけではありませんから、意味はわかります。だから、同時代に生きている私たちはこの素晴らしい本をすぐに読み解いて、わからないところがあればどんどん質問すればよいと思います。

わたしは都合で先日江ノ島であった出版記念会に出席できなかったものですから、今日は喜んでうかがいました。

猪野修治 いいださんの怪物性に関するいくつかの指摘と、芸術的立場からのコメントをありがとうございました。 針生さんは、この本はそんなに難しい本ではないとおっしゃ

られましたけれども、そう思われた方はおそらく皆無じゃないかと思います（笑）。なにしろ私自身も 4 ヶ月この本に集中しました。たいへんに疲れましたし、たいへんに勉強になりました。したがって、先日いいださんのお宅にお邪魔したさい生意気にも、この会は専門家集団相手の研究会ではない、いいださんの思想をだれにでも、わかるような方法で話をさせていただきたいと、強く申し上げました。いいださんにも快諾いただきましたので、そういう話をうかがえればと思います。

リプライ講演：

〈主体〉の再生がなぜ必要か

いいだ もも

1 針生さんの怪物性

批評では天下第一等の針生さんがせつかくこの本は非常に易しい、とタイコ判を押してくださったので、この本の普及にとってはいいなと思ったら、猪野修治さんがまた司会の特権を利用して、そんなに読みやすい本ではない、とわざわざおっしゃるので（笑）、どうも猪野さんはこの研究会を妨害するためにやっているのではないか、と思うんですが（笑）、針生さんのおっしゃるように、こんなに読みやすい本はありませんから、安心して読んでいただきたい、と思います。

でも、針生さんがいいだももの“怪物性”についてお話ししてくださいましたが、怪物の本はなかなか読みやすいとはいえませんし、わたしからいわせてもらえば、針生さん自身が天下に比類のない怪物ですから、その極めつけの怪物にいいだもものは怪物だといわれちゃうと非常に困るんですが（笑）。私もまだ多少の娑婆気がありますから、そういわれてまんざらではないんですが、同時にもう 82 歳ですから、良かれ悪しかれ娑婆っ気がない。だから有り体に申しますと、そういうふうにいわれて特別嬉しいということもありません。娑婆っ気がなくなると、物事をつくるうえにおいては善し悪しがありまして、娑婆っ気がだんだん抜けちゃうと碌なことにはならない、という反面の自戒もありますけど、そのところはごく普通に淡々と受け止めるということになると思います。

針生さんが、思想家としていかに純潔で大怪物であるかということについて、ちょっとお話しします。つまり、針生さんは私と同じで戦中・戦後をたっぷり目一杯生きてきていますが、共に戦後のマルクス主義者ですから、そこを皆さんに説明しないと、ちょっとわかりにくいところがあると思います。

戦争中に景山正治に率いられた「大東塾」という右翼の政治的集団がありましたが、「大東塾」の人たちは戦後になってほとんど代々木で腹を切って自決しましたから、思想的な純潔性という点では純粹右翼です。わたしは思想で生きている人間ですが、思想の方向性についてはあまり厳密には問わない面を持っています。しかし、事柄の思想的純潔性というものからして、彼らは命を賭けて「大東亜戦争」をやったわけですから、戦争に負けたあとも生きている右翼というのは、そんなものは右翼でも何でもないとわたしは思いますから、戦後において何ら信ずるに足りないですよ。やっぱりそのときに腹を切った「大東塾」の連中は、それなりに思想的に事柄を全うしていると思っています。

わたしは戦争中からまったくのマルクス主義者で反戦主義者でしたから、針生さんとそ

の点では同じ「暗い谷間」に生きた十代の少年としても違いがあるんですが、「大東塾」の名のある歌人の一人に針生一郎という少年がいるということは、わたしは戦争中から知っていました。だから、その針生氏が戦後、先鋭なマルクス主義者になって現われて、「夜の会」とか「世紀の会」とか「世代」とかでわたしと交流をもって、それから後はずっと一緒に同じ道を歩むことになったので、その思想的な変転が針生さんの怪物性ということだと思って、非常に興味をもっています。

戦争に負けたときに、8.15ですけれども、わたしたちは単純に言ってその8・15転換のおかげで生き延びたわけですから「バンザイ」しかないんですけれど、針生さんはそのときに「徹底抗戦派」に属していて、仙台におられたんですが、仙台の山ん中に入ってアメリカ占領軍に対してゲリラ戦をやろうとしていた。だから、ほとんどの「大東塾」の塾生が腹をかっさばいて死ぬのと同じことを、それ以上に苛烈な覚悟をもって山に入られた、と思うんですね。

戦後になって灯火管制がなくなりますから、明かりがつかますね。針生さんはきっと、山の中から明かりのついた仙台の街を見た、と思うんです。で、明かりがつくとやっぱり、コーヒーなんか飲みたくなりますからね（笑）。それで徹底抗戦をやめたってことになるんですよ。これはわたしの想像ですが、だけど針生さんはそういうたいへんな怪物性を持った方でして（笑）。

だから針生さんにとっては、思想の純潔性ということでは、戦争中のシグナルはウルトラ・ナショナリストであったんでしょうけれど、戦後の、ナショナリズムを超えるマルクス主義というのも或る種のウルトラ・マキシアリストですから、左へ転じた方向でもって首尾一貫して規制左翼をもさらに左へ超えてゆくスターリン主義批判を続けて、今日まで我々と一緒に生きてきている。そういう方だと思うんです。

転換は転換ですから、針生さんは戦後うじうじとなった経過も多少は一時期あつただろうと思うけれども、或る時期からはわたしと同じで実に恬淡とされていて、そのことについてはしょっちゅうお話しになっている。針生さんの怪物性というのは、思想的純潔のテーマにおいては思想のレベルを超えていますからね、そういう意味で非常に有名な方です。そういう方がこの本を易しいとおっしゃってくれた。ですから皆さん、これは極めつけに易しい本だってことを宣伝しましょう（笑）。

2 「神妙の域」に近づく努力

さて、ここからリプライに入りたい、と思います。

まず片桐薫さんは、前半は葛飾北斎と富岡鉄斎の話、後半は片桐さんお得意のアントニオ・グラムシの話で、どちらもわたしはたいへん面白かった。わたしはどういって葛飾北斎という大画伯と比べられるような人間じゃありませんが、わたしなりに北斎のことは非常に大好きでして、どういうところが好きかというと、彼はだいたい自分の70代までの仕事

というのはまったく仕事になっていない、と言っているんですよ。あらゆる偉い人はそうだと思いますがね。で、80歳になって多少はものになってきたという自覚で生きているんです。そのとき北斎は判子をつくって、それは一百という字を崩した非常にいい判子でして、わたしも実は同じようなのをつくりたいとかねがね思っているんですけども、百を自分の生きる目標にした。100歳になれば「神妙の域」に入る。まあ、画境とか文化というものとはそういうものだろう、と思います。

最期のところは「富岳百景」の赤富士とか、怒濤の向こうに見える富士山だとか、あういう傑作は古今東西絶後のものだろう、と感心しますけれども、北斎にとってはまだその先に期するところがあって、「神妙の域」に入れば俺の絵はこんなものじゃない、という気持ちはあったと思います。あまり欲張ったらだめですけども、わたしも「神妙の域」に近づきたいな、と。つまり、わたしはまだまだ「神妙の域」にはなっていないですが、この超枕本の3冊がいくらかは八十歳の気が出ていれぼうまいな、と思っているんです。

富岡鉄斎も非常に好きな絵描きでして、これは単なるわたしの好みですけども、わたしの場合には、はじめに中国の官画壇の免許皆伝を得た雪舟ときて、それから絵画史上では画期的な桃山時代に狩野探幽、長谷川篤伯、その流れの尾形光琳が出て、それから片桐薫さんがおっしゃった葛飾北斎、富岡鉄斎ときて、あとは日本にろくな絵描きはいない（笑）。現代では日本一の目利きである針生一郎さんを前にして、口はばった言い方になりますけれども、だいたいわたしのそういう目利きで日本人の絵というものを鑑賞しています。わたしは鉄斎や北斎には及びもつかないけれども、及ぼうと思ってこういう仕事をしているつもりです。

3 オリентとオクシデントの転換

この本のⅠ部では現代思想を扱っており、先ほど片桐薫さんと針生一郎さんが言及してくださったように、「ヴィトゲンシュタイン vs メルロ・ポンティ」として、現代における思想の対質の問題として世界と日本においてどういうことが第一の主題になっているのか、つまり、21世紀を仮りに人類が生き抜こうとするならば、何を解かなければいけないのか、解くべき主題として何が提出されるのかということ論じています。

Ⅱ部とⅢ部は歴史編ですが、主題を読み解くためには8000年分の歴史が必要であるとしています。古典古代ギリシアは紀元前6世紀頃のことですから、たかだか2500~2600年です。わたしはそれでは足りないと思っています。

まず、ヘロドトスの『歴史』と司馬遷の『史記』が東西にあつて、これから「歴史」が始まるんですね。わたしはそのことは認めたくて、第2次世界大戦後のさまざまな発掘の成果を考慮する必要があり、そうすると歴史は訂正されてもっと遡るとして、それを「8000年の助走」と書いたわけです。

わたしが戦争中にいちばん影響を受けた本は、ヘロドトスの『歴史』ですが、「生活社」

という今はもうない、戦争向きじゃないよい本をたくさん出していた出版社から、ヘロドトスの『歴史』とツキュディデスの『歴史』が出まして、それを読んだのが16歳のときです。当時は20歳になれば戦争に引っぱられて死ぬわけですから、あと4年だなと思って、自分の短い人生はどういう世界史の中に位置づけられているのかということが知りたくて、この2冊を読んだんです。それから、ヘロドトスの『歴史』は、何回読んだかわからないくらいのわたしの人生にとっての愛読書になりました。

それにはどういうことが書いてあるかという、オリエント（東洋）とオクシデント（西洋）がどこで入れ替わったかという、世界史的転機についてなんです。いうまでもなく、オリエントを代表していたのはペルシア帝国です。ダレイオス1世とかクセルクセス1世などの偉大な王がいたペルシア大帝国が、輝かしいオリエントの代表としてあった。「光は東から」なんです。世界史の始原は。

そのペルシア帝国がいよいよ「西」へ食指を動かして、その手はじめに地中海を制圧しようと思って乗り込んだときに、それを迎え撃ったのが、地中海の眇たるアテネを中心とした数十カ国からなる諸ポリス国家の連合です。これが、マラトンの陸戦、サラミスの海戦で有名なペルシア戦争です。ポリス連合軍はペルシア軍を打ち破り、今から2600年前に世界史はそこで大転換を遂げて、現在のような西洋中心主義的な図式になったわけです。

この構図をたどるということと、現在の位置を確かめるということは非常に大事なことで、ペルシア戦争のあとポリス国家が地中海に進出し、それ以来現在まで、オリエントを放逐したオクシデント中心の、古典古代ギリシアから発祥したいわゆるヌース（nous）といわれている「理性」の文明が、グローバルに世界を覆うことになって、今日のインターネット資本主義によるグローバリズムの世界ができあがったわけです。この世界が我々にとって満ち足りたものであるならば、それでいいんですけども、わたしは一から十まで満足していないものですから、これを覆すということを自分の人生の生き甲斐にしています。ですから、そのどこに歴史の転換の根本的な転倒があったのか、ということ明らかにしなければいけない、そういう気持ちでヘロドトスの『歴史（ヒストリアリ）』を16歳の時に読んだわけです。

3 地中海世界史の終焉と西洋文明の始まり

この本でわたしが全体の5分の1くらいの精力を費やして書いているのは、第2次世界大戦前後にクレタ島でいわゆるクノッソス文書が発掘された、という問題についてです。これは考古学的な新発見ですから、これによって第1次世界大戦までの歴史書は全部書き換えられないといけないのですが、皆さんが高校や大学で学ばれた歴史書というのは、相変わらず古いままで。わたしはそれが先ずもって気にいらなくて、この大部な三部作のかなりな部分を費やして書いたわけです。今の歴史学は、ヘロドトスと司馬遷以来の歴史書をそのままに信じて、それで成立していますから、全部インチキですよ。まったく間尺

に合わない。神武天皇の昔ほど古くはないですが、だいたいそれと似たようなものです。そんなものをいくら読んでいても、世界史の本当のところはわからないし、ましてや、これから後の世界史がどうなるのかなんて、わからない。

イギリスのエヴァンズという考古学者が、第2次世界大戦前から始めて、戦後までかかってクレタ島の文書を発掘しました。これが「クノッソス文書」です。エヴァンズは、アルファベット以前の或る種の文字を発見したと信じていたんですが、新しい発見をした人は、どうしても自分の発見に拘束されてしまうんですね。だから、学問の研究は或るところまでは行くんですけども、本当の意味で根本的に展開するためには、その拘束が研究にとって逆にマイナスの環境になってしまう面が出てきてしまう。

どういう理屈かという、かれエヴァンズは、クレタ島を中心に考えていましたから、アテネとかの古典古代ギリシア文明は、クレタ文明の第2次的な派生物だと考えてしまう。それで、エヴァンズという人は、たいへんに優れた学者でしたが、門下生らが手掛けているさまざまな歴史的発掘でも、自分の論を覆すようなものは権力でもって押さえ込んだ。すぐれた門下生の新しい創発的な研究の考古学的発展も、押さえつけて遅らせてしまいました。

ところが、第二次世界大戦後の今日の時代の或る時点で、ヴェントリスという考古学者が、アメリカの有名な言語学者チャドウィックの協力を得て、この「クノッソス文書」を解読したんです。そうしたら驚くべきことに、これはアルファベットとは違うギリシア文字であったことが判明した。線文字文書Bの解読で、Aの方はまだ解読されていません。

ここでわたしが何を言いたいかというと、地中海文明の後期というのは、クレタ文化も含めた城塞国家の文明なんです。これは、アテネを中心としたエーゲ海上のポリス国家とはタイプが違う、それ以前の、マルクス主義用語でいうと家産制であって貢納制であった時代の文明です。クノッソスの線文字Bが解読されたことで、そういうことが判った。ここでは各島に王家があって城塞を構えていて、王家ごとに文書があった。それは歴史書というよりは、その王家の家計簿みたいなもので、羊が何頭いて牛が何頭いたとかという家産の明細なんですね。それが解読されたということは、歴史にとっては決定的なことなんです。なぜかという、エンゲルスがいつているように、記録されてから後が歴史なのです。これは千古の名言で、わたしはマルクスとの対比でエンゲルスはあまり買いませんけれど、そのかぎりではエンゲルスのこの指摘は正しいんです。

クレタ島の「クノッソス文書」が解読されて、それがギリシア文明のギリシャ文字による出納録であったことがはっきりして、歴史はひとつ遡ったわけです。さきほど、この第二次大戦後の考古学的発掘の成果を考慮しない歴史はインチキだと申し上げましたが、これに8000年の昔から地中海文明があることが文字の証拠を残してちゃんと書いてある。2500~2600年前くらいからポリス国家文明になりますが、それ以前の地中海史というのは城塞文明で、家産制で貢納制の文明で、しかも母権制国家でした。そういう文明がトロイ世界戦争で転撤したことが判ってきて、歴史がそこで不連続になってしまったので、

欧米の学者は処理に困ってその時代を「暗黒の時代 (Dark Age)」と呼んでいた。ヨーロッパでは中世のことを「暗黒の時代」と呼んでいましたから、その連想でもって古代地中海世界史における「暗黒の時代」としたわけです。

ところが、その「暗黒の時代」の手前にホメロスの偉大なる「英雄叙事詩時代」があります。これは口承で語り伝えられた時代ですけれども、最後のころにはアルファベットが出現しますから、口承叙事詩はすでに文字化されていたことも確かなんです。ですから、「ホメロスの時代」から「歴史」はもう始まっているんですね。ヘレニズム時代にかけてのヨーロッパの考証学というのは、そのほとんどがホメロスの『イリアス』『オデッセイ』の諸ヴァリアント文書の比較考証と言っていいものです。

ホメロスの「英雄叙事詩」には、トロイ戦争のことが専ら書かれていますが、このトロイ戦争こそが地中海世界史の古代史を終焉させた「世界戦争」ではないか、ということ、人々は早くから感じていろいろなことを説話にしてきた。学者からはなかなか肯定的で積極的な論が提示されなかったのですが、それを決定的に明らかにしてしまったのが、有名なシュリーマンによる「トロイの発掘」なんです。この発掘は第 1 次世界大戦前後ですから、20 世紀になってからのことです。発掘の結果、トロイの遺跡は 8 層にわたっていたということが判明しましたから、トロイ戦争が世界戦争であるならば、8 回の世界戦争が二百年にわたってくりかえしあって、トロイは戦争のたびに滅びては復活し、滅びては復活し、を繰り返したのではないか。それが歴史的事実であることが、シュリーマンによって明らかにされたのです。

シュリーマンという人は、いろいろ悪口を言われることも多いですが、わたしは実に偉いなあとと思います。子供のころにホメロスの叙事詩を読んでトロイ戦争のことを知って胸を躍らせ、これこそ歴史的事実だと信じた。それを学者にいわせればまったくもって頭が弱いということになるんですが、頭が弱いのは学者のほうなのでして、シュリーマンのほうが正しかった。かれの考古学的発掘がなければ、トロイ戦争の実在そのものが証明できなかったわけですから。

シュリーマンのおかげで、「暗黒の時代」といわれた時代にはトロイ戦争という世界戦争が 200 年にわたって荒れ狂い、これによってさしものミノア・ミュケーネ文明としての地中海世界史が滅んだ、ということが明らかになった。それからポリス国家の黎明があった、と。だから、オリエン트가滅んだのはトロイ戦争が原因だったんで、決してオリエン트가バカだったから滅んだわけではない。そして、その世界戦争がもたらした暗黒時代の後でエーゲ海を中心に新たに興った 200 くらいの小さなポリス国家が＝アテネのような大きいところでも数万人の規模ですが＝彗星のごとくに抬頭してきて、あっという間に 2500 年のこんにちの世界の形ができたという話です。

4 東アジア世界史

西における歴史が、ヘロドトスの『歴史』で始まったように、司馬遷の『史記』から、中華王朝を中心とした東アジア世界史も生まれたわけです。それは、匈奴や突厥による遊牧共同体と、中華文明の根幹である農耕共同体の文明との絶えざる抗争の歴史でありました。秦の始皇帝が「万里の長城」を築くことによって、襲来する遊牧共同体と農耕共同体による中華王朝国家の識別がそこで可能になった。つまり、区切り線がはっきりすることによって「歴史」が始まったわけです。歴史とは概念分割（ベギリア）なんです。

しかし、その後、近頃になって、ご承知のように、「甲骨文」というのが出てきました。発見されたのは20世紀になってからですが、そのいきさつは、北京近郊の葉屋さんが古い骨を削ったものを薬として売っていたのですが、その骨に文字が書かれていた。調べてみると、それは殷の国家が占いに使っていたもので、占いの文言が亀の骨に彫られている。それを解読する学問は、20世紀に非常に発達しまして、清の時代から——羅振玉ですが——日本における東洋史の大家というのも、貝塚茂樹さんはじめの、その流れを汲む専門家です。そのあとまた、「金石文」という金物や石に彫った文書が発掘されましたが、これらは司馬遷が読み解いた、竹冊という竹の簧に書かれた文字とは違った系統のものだった。甲骨文、金石文が解読されてからあとの東洋史の進歩はものすごく、それは現在でも続いています。

例えば、殷の前の夏という国は伝説だといわれていましたが、トロイ戦争と同じことで、実在していたことが、第二次世界大戦後の今日になってわかってきました。不思議なもので文字の読解力が出てきて、書かれてあることに従って掘ってみると、実際にいろいろと出土してくる。あの兵馬俑なんかは、『史記』を読んでいるかぎりでは出てこないですからね。今は夏以前にも、さらに古い王朝があったといわれています。

すると、中華王朝国家も、そのはじめの時は農耕文明ではなくて、遊牧民だった「商」などの民族の共同体であったことがはっきりするわけです。やっとならば秦の始皇帝にいたって中原のほうに文明の中心が移ってくるわけで、中国史の源流という点では秦国家は支流なんです。これは、オリエントのペルシア帝国が滅びたあとに、「地中海のポリス国家の叡智の文明」が出てきたということに、似た面があります。こういうことを考慮していない西洋史や東洋史、世界史はもう一度申し上げれば全部インチキですから、そういうものを頭から払いのけて歴史の真相を見なければ、これからの歴史のことはわからない。

これらの歴史については、この本の第Ⅱ巻、Ⅲ巻で取り上げていますが、やはり第1次世界大戦後のトロイ遺跡の発掘と、第2次世界大戦後の「クノッソス文書」の発掘以後とは、世界史における在来の通俗的な理解を改めなければならない。そうすると、「人類文明史」というからには、文字があるわけですから、文字が綴る範囲でいってやはり地中海世界史というのは8000年の歴史をもっているといえる。トロイ戦争があつて、そのあとポリス国家が地中海世界の東のほうのエーゲ海から出てきて、それから2500年の、わたしに

いわせればごく最近の歴史が始まって今日にいたっていると、そういうふうに世界史を読み解く必要があるというのが、わたしの先ずもってこの本で言いたいことです。

5 フッサールの現象学

次に、ヴィトゲンシュタイン vs メルロ・ポンティという構図についてですが、片桐さんのヴィトゲンシュタインについてのご質問に答えることも含めての話になります。

わたしは現代思想を第 I 巻で扱いましたが、そこでいいたかったことは、20 世紀的現代になってから、思想の第一線では何がいちばん問題になっているかということです。日本でもバカバカしい哲学者はたくさんいて、いうなればぜんぶ田舎哲学でして、そういう人たちがいろいろいっていることは哲学とか思想とかに何の関係もない。ただ頭でいっているだけの話で、大学でそういう講義を聞いて真に受けている学生たちは気の毒だと思います。

針生さんがおっしゃったロマン・インガルデンという、わたしも非常に珍重しているポーランドの大学者の説にもつながるんですが、要するに 20 世紀にはいつてから哲学というのは、エドモンド・フッサールが始めた現象学（フェノメノロジー）に集約される。それ以外の哲学はないんです。日本の哲学者たちはあるようなふりをしていますが、それは商売上のネタだからです。フッサールを読めば、そのことは明々白々です。1938 年に出た『ヨーロッパにおける諸学の危機と超越論的現象学』で 20 世紀の哲学は決定するんです。まだ読んでいない方はぜひ読んでいただきたい。ヨーロッパの諸学は哲学も含めて、フッサールによってその時点で死亡宣告を受けてしまっているのです。それをまだ生きていると思ってお喋りしている専門家たちはヤブ医者です。

フッサールは、ヨーロッパの諸学はすべて滅びてしまったということの確認をまず行なっているんです。これは非常に大事なことです。日本は常に後発的で、ずっと西欧的近代に追いつこうとしていますが、その近代、いわゆる西欧の中心でフッサールがヨーロッパの諸学は終わったといっている。そして、その危機を超えるにはどうしたらいいかと考えて「超越的な現象学」ということをいったわけです。それで現象学的還元ということをして、生活世界から出発した。「エポケー」が必要になってくるのも、既成の雑念を全部追っ払ってしまわなければならないからです。

さっき針生さんが、わたしの話は観念的・思想的な高見から世俗的なほうに急降下して、また高見に上昇していくのを繰り返すとおっしゃいましたが、生活世界から出発したというフッサールの文章は超越境に舞い上がったきりの文章で、それはたいへんなものです。現象学的還元ですから、生活世界から出発するんですが、そこにおける世俗的なことは全部括弧に入れてしまって、そのところはエポケー（思考停止）してしまうわけです。そして根本的な概念を組み立てるところから設定をしないかというところから設定をしないかぎり、いくら世俗的な生活のところであれこれいってみても、誰だって世間のことはわか

りきっているわけですから、何の役にも立たないわけです。

20 世紀初頭に、エドモンド・フッサールの『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』が出ます。これで 19 世紀までの全哲学が、パラダイム・チェンジして、旧哲学はぜんぶがお払い箱になるわけです。

フッサールの本を読んで、もうこれからは現象学（フェノメノロジー）しかないんだということで、そこから出発した人は、それ以外のことをやっても虚しいと思っているわけです。そこをいくら突っついて実際には何ひとつ新しいものは出てきませんから。そのところは先ずもって第一に押さえておいていただきたい。わたしはマルクス主義者ですけど、「現象学マルクス主義者」だとずっと言い続けているのはそういうわけであって、20 世紀的現代においては、現象学としてのマルクス主義以外にはマルクス主義哲学もないんです。現象学以外の哲学というのはないだろうということは、インガルデン自身をみれば非常に明白です。かれも「現象学マルクス主義者」ですから、わたしや針生さんと同じような考えでやっていんだと思います。

6 人類文明の危機と〈主体〉の再生

ヴィトゲンシュタインに接近するうえでもうひとつ、片桐薫さんがおっしゃったように「言語哲学」の問題があります。現象学を考えるうえでもこのことは重要です。ちょっと脇道にそれますが、大事なことなのでお話いたします。「言語哲学」というのは、わたしの言葉に言い換えれば「言語批判」ということです。20 世紀の哲学・思想を考える場合に、大きな勘どころが二つありまして、ひとつは「言語批判」を媒介にしているかどうかということです。今さら言うのも変ですが、20 世紀の思想のメルクマールのひとつは「言語批判」なんです。リングィスティック・ターンつまり「言論的展開」ということです。これをくぐっていない哲学や学問は、そんなものでおよそ物の役には立ちません。

先ほど針生一郎さんがおっしゃった、ウィーンとかプラーハとかミュンヘンとかベルリンとか、という場所を頭に置いてください。20 世紀のヨーロッパ文化の中心はウィーンでした。それはつまり、ハプスブルグ王朝の首都のことです。ハプスブルグ帝国（オーストリア＝ハンガリー二重帝国）は、第一次大戦の敗北で滅びてしまいましたが、ヨーロッパの近代文化はみんなここから出ています。

19 世紀末にウィーンでどういう風習が起きたかという、ホフマンスタールの『チャンドス卿の手紙』という本がありますが、岩波文庫から出ていますからぜひお読みいただきたいのですが、これが当時のヨーロッパ文化に与えた影響は決定的なものでした。これを経過したかどうかでもって、ヨーロッパの思想家なり文学者なりが現代の文脈に耐えうるかどうかが決まると思います。

わたしは、ヨーロッパの現代文学としてはフランツ・カフカとジェイムス・ジョイス、それにベルト・フォン・ムジールしか認めていません。それ以外は、たとえ 19 世紀の文学者であつとしても現代の文学者ではないくらいに思っています。ジョイスは、ダブリン生まれのアイランド人です。カフカは、いうまでもなくチェコスロバキアの人であつて、ユダヤ人です。ムジールはやはりユダヤ人で、「特性のない男」です。二人とも正統的な白人系白人文化に属していない。19 世紀まではヨーロッパでは正統的な白人文化が威張っていましたが、それはどこに行ってしまったのか。ヨーロッパ人は正統的な白人文化の発展がいやになったのか、そこから逸れて「オリエンタリズム」になってきた。サイードの言う通りです。白人文化の王道がナチス・ドイツのヒトラー文化です。白色系であるからには、あれ以外にあり得ないんです。「アーリア人種絶対」なんですから。ユダヤ人であろうと、ジプシーであろうと、「非アーリア」はすべて絶滅させなければいけなかったわけです。「血の純潔」という生物学的プリンシプルです。ユダヤ人とジプシーは、実際にほナチス・ヒトラーのヨーロッパ支配下にほとんど絶滅されかけたじゃないですか。そこで生き残ったのが、例えばフランツ・カフカの文学です。カフカは、両親も 3 人の愛する妹たちも親族も、全部アウシュヴィッツで死んでいます。カフカ自身はたまたま体が肺病が弱かったから、ナチスに捕まる前に死んでしまって、文学だけが生き残った。そういう苛烈さを抜きにして、20 世紀の現代文学を語ることはできません。

20 世紀におけるオデュッセウス（ユリシーズ）は、いかなる放浪＝世界遍歴を余儀なくさせられるか、ということ、半日の出来事として書いたのが、ジェイムス・ジョイスの『ユリシーズ』ですが（わたしの本のタイトルの「ユリシーズ」はいうまでもかれのこの本からとりました）、ジョイスの『ユリシシリーズ』は、お茶らけで書いているように一見、見えるけれども、20 世紀の日常的危機を描いた傑作です。現代一は日常性において危機が充満しているので、人間は完全に「非人間」として変形せざるを得ないということ書いているわけです。

古代の世界における最初の「個性」の出現であるオデュッセウスの世界遍歴は今回で万人に普遍化されてしまっていて、ロベルト・フォン・ムジールが書いた「特性のない男」として、完全に「無個性」として現われるわけです。この大作品自体が結局、未完成のまま終わってしまうわけですが。だから、『ユリシシリーズ』に危機感が描かれていることがわからない人は、これを読む資格はないのです。

20 世紀の恐るべきところは、日常の生活の中で人間がとことんまで疎外されて、つまり人間ではなくなってしまうという由々しき事態の普遍化のことであつて、そこから人間性をどう取りもどすかということが、わたしのこの超枕本の主題です。

現在は〈主体〉というものが、グローバリズムのために剥奪されて無くなくなってしまったわけですが、〈主体〉が再生できなければ、人類もこれで終わりだと思えます。そういう問題意識です。だから、このまま行けば、21 世紀の半ば頃で人類の文明は終わるんじゃないか、少なくともわたしはそう思ってます。しかしだからこそ、片桐薫さんをご指摘く

ださいましたように、この本の第1頁目に「21世紀とは希望の世紀である。希望の世紀にしなければならない」と書きました。

「希望の世紀」に21世紀をするためには、〈主体〉を再生しなければいけない。逆に再生されなかったらどうなるのか、という問いも、当然そこに含まれています。〈主体〉を再生するためには、8000年という歴史の助走を跳ばなければならない。ヴィトゲンシュタインの方法ではなくて、メルロ・ポンティの方法で跳べば、再生できる可能性がわずかに残されている。だからわれわれはそこを決死の勢いで跳ばなければならないということを、全3巻にわたって言っているわけです。跳べなかった場合には、21世紀の半ばに人類は地球と一緒に滅びるんだ、と。そういうことをわたしは六十年というもの言ってきましたが、ちっとも反響がないことが不思議なくらいです。またあのバカが大風呂敷を広げて「滅びる、滅びる」と御託宣している、と世間が思うんですね。

だけど、本当に〈主体〉を再生しなければ、21世紀半ばで人類は滅びます。例えば、いまブッシュの下でわれわれが死力を尽くして戦っているイラク戦争の泥沼化ということが現にありますが、わたしの「大風呂敷」の先見によれば、サマーワからの日本自衛隊の撤収はもう至近うちにやってこざるをえない。年内にブッシュの米軍も撤収に追い込まれざるをえないでしょう。さらにもっと深刻なこととして、イラク戦争の泥沼化が孕んでいるアメリカの赤字国家財政と原油高とドル危機の問題がありますが、わたしは2、3年の時限で切って確言していいですが、いまのドル本位制の変動相場制は近いうちにパンクして世界的規模で没落します。ドル本位制のなくなり去った資本主義はもう資本主義とはいえませんが、どうなるかということが一から問われるわけです。そういうところに現にいま来ているわけですから、それを乗り越える構想力をわれわれが起こさなければ、やはり世界史、人類文明史は終わりです。われわれが〈主体〉の再生しなければならないという問題の不可避性、それも緊急性が現にあるわけですから、それに成功しなければ、エコロジカル・クライシスで地球もろとも人類文明が崩壊してしまわざるをえない。

今度は地中海世界史のように或る地域に限定された文明ではなく、グローバリゼーションの極のところまで来て、西暦2006年になっているわけですから、もう外がないんです。これで滅びれば、本当に終わっちゃうんです。地中海世界史は滅びても外の世界（中世のヨーロッパ）があったけれども、今度は地球の外には出られませんから、完全に終わりです。そういう意識でもって、この本を書いています。そこで、ヴィトゲンシュタインです。

7 沈黙してはならない

日本はだいたい十年遅れで欧米の流行思想を取り入れて、それで学者連中もひとしきり飯を食うというけっこう、かつけたいな国ですが、中年遅れていまヴィトゲンシュタインが日本でも流行りだしているようです。欧米では第2次世界大戦後にヴィトゲンシュタイン一色でした。亜流の学者がごまんといて、ファンもたくさんいた。欧米の学生たちは

みんなヴィトゲンシュタインのファンでした。欧米の学生はみんな頭が弱いですから、中身なんか理解する能力がないからいろんな仕草を真似するんです。そういうのも流行った。日本でもいまの大学生たちは頭が弱いですからね、これから大流行するんじゃないですか。学者もヴィトゲンシュタインの本をどんどん書いて、くだらないものばかりですが、片桐薫さんは、もちろん批判的観点からですが、すこし、そういう本を読みすぎたんじゃないですか（笑）。

ヴィトゲンシュタイン哲学は、前期と後期に分けられ、前期ヴィトゲンシュタインは世界的によく読まれています。そのうち、『論理哲学論考』は批判的に読み進めてみる価値があります。『論理哲学論考』というのは、或る意味で 20 世紀において滅びざるを得ない大きな論理哲学です。それは要するに、論理的な原子論の経典です。「論理的な原子論」というのは、世界も、世界を認識する認識も、全部要素からできあがっていて、要素の集合体として世界はあり、認識の枠組みがある、という考え方で、ひとつの論理的命題から演繹して七十いくつの論理的な思考形式を満たしていく。最後に有名なテーゼがあって、わたしは、それがヴィトゲンシュタインの上品に言ってあげれば「白鳥の歌」、鳥の死なんとするやその声は哀しいですが、有り態に言ってそれは白鳥の歌の終わりの無惨な自己破綻であると判断しています。わたしは、ヴィトゲンシュタインを読んだという人は、本当は読んでいないか、読み通せなかったんじゃないかと、いつも思うんですが。読み通せば最後に、ヴィトゲンシュタインに梯子を外されて宙ぶらりんになってしまいます。必ずそうなります。その最後のテーゼというのが、「言表できない世界については沈黙しなければいけない」です。

これはたいへんなテーゼです。そこでハタと行き止まりになってしまっただけは、思考はもうそれ以上には進みようがありませんからね。そこをどう突破するかということが、20 世紀の現象学に問われている最大の問題なんです。世界があっても、世界を言表することができない、という論理的現象というところまで、ヴィトゲンシュタインがそこを詰め切っているわけです。言表できない世界があって、それ自体を言表できなから沈黙しなければいけない、と。

わたしは、そうじゃない、という気がするんです。ヴィトゲンシュタインの言い分は、一見もつともだと思いませんか？ でも、わたしはそこからしか、つまりヴィトゲンシュタインのそういうことに対する批判的な眼差しからしか、20 世紀の現象学の発展はできないと思います。

これは、ごく単純な問いかけなんじゃないか、と思うんです。ヴィトゲンシュタインが生きていたら、聞いたかったですね。あなたはそういうことを言うけれども、あなたの言葉自体は言葉なんですか、沈黙なんですか、と。言表できない世界については沈黙しなければいけないというのなら、あなたは沈黙していやそれでいいじゃないですか。なぜ人前にノコノコ出てきて麗々しくそんなことを言表する必要があるんですか。麗々しく言う以上は、あなたの言っているのは、あなたの言葉なのか、沈黙なのか、どっちなんだ、と。

確信しますが、わたしにそう反論されたら、定めしかれば立ち往生ですよ。本来、そこからしか思考というものは始まらないということなんです。メルロ・ポンティというのは、生涯そのことを主張した人です。「言語批判」がなぜ重要なのかというと、そういう問題なんですよ。

8 見えるものと見えないもの

ホフマンスタールの話に戻ります。世紀末のウィーンです。ホフマンスタールは『チャンドス卿の手紙』を書きました。それは、カフカも含めてヨーロッパのあらゆる知的な人々に絶対的な影響を与えました。『チャンドス卿の手紙』はどう言っているのか。言葉というものは現代では、それを発する自分の舌の上でボロボロと崩れて行って完全に跡を留めなくなってしまう。あとには苦い味しか残らない、と。これは現代人の言語感覚です。この言語感覚を持たない詩人の言うことは、このアウシュヴィッツ以後、ヒロシマ以後の時代では何ひとつ信じることはできません。アドルノが「アウシュヴィッツ以後に詩を書くのは野蛮（バーベリズム）である」と言っている通りです。

さて、ホフマンスタール自身は、そのうえで詩や小説を書いた。でも、どうしたら書けるのか。これが問題です。ヴィトゲンシュタインのように、だから沈黙するほかない、ということにはならない。みんな何らかの意味でそのところを経過して、さまざまな言語表現をやってるんです。だから、20世紀の言語表現とは「言語批判」というものを濾過したうえでのものであり、それ以外ものは全部旧世紀のものなんです。言葉は舌の上で崩れないと信用できないというのは、わかりにくい表現ではありますが、逆に崩れない言葉は20世紀においてはぜんぜん意味がないわけです。20世紀には世界は木っ端みじんに崩れるわけですから、そのままでは表現できなくなった。毎日そういう世界に相對していて、人格そのものも砕かれつつある。そんなことがわたしたちの日常経験になっている。

メルロ・ポンティの遺作に『見えるものと見えないもの』という未完成の論考がありますが、わたしはここでの彼の遺志を継がなければならない、と思っています。ヴィトゲンシュタインに言わせれば、見えるものについては言表できるから言葉で言えるけれども、見えないものについては言表できないから沈黙しなければいけない、それで終わりなんです。

メルロ・ポンティは、古典古代ギリシア以来の文明というのは可触的・可視的であると言っています。なぜかおわかりでしょうか。地中海にはきらめくような陽の光が絶えず降りそそいで、青い海に青い空がある。そこに彫塑のようなくっきりとした像があつて、それは目で見ることが出来る＝可視的で、手で触れる＝可触的なものです。要するに、彫塑的な文明がそこにできた。これがヌース（叡智、理性）の文明なんです。それが現在まで続いている。わたしのこの三部作の「古典古代ギリシャ文明」は、そのことを勘所として押さえて書かれているのです。

われわれの文明のあり方というのは、そういうものとされてきた。それを疑うにいたったのが、それから 2600 年たった現在なんです。いまわれわれは、本当に真理に触れられるなんて思っていないし、目で見える形象力があるものはことごとく崩れ落ちる時代に生きているわけですから。

では、どうしたらそういう形象的なものを復活させることができるか、ということが、われわれの切実な問いなんですね。三木清風にいえば「構想力の論理」の自己形成の問題です。わたしはカフカが好きですから、それを例にとりますが、カフカは現代においては「実存的不安」というものが普遍的になったんだ、というところから出発しています。自分自身が実存的不安で、実存の根底、自分の足元が不安なんです。そこでどうすれば何かを形象することができるのか。それは非常に謎であるし、難しい。カフカの作品を読めば、それはおわかりのことと思います。

『城』という作品があります。北のほうの丘の上に青い空に映えてお城が見えている。一人の男がそのお城を目指すのですが、なかなか辿りつけない話です。男は測量技師で、その城主から測りたいものがあるので城まで来てくれ、という書状をもらって、そこでこの麓の町に来ている。麓から小道をたどるんですが、いつまでも行き着くことができない。遠くなるかと思うと近くなり、近くなるかと思うと遠くなる。どういうことか、わかった方はいらっしゃいますか？ わかろうと思って行くんだけど、わかるところに行き着けない文学なんです。つまりそれは「プロセス」を書いているんですね。だから、カフカの実生活は、わたしは実際に見たわけではありませんが、なにしろ同時代なので手にとるようにわかる。

人間はなぜ生きるのかということ、生まれた以上は考えますが、考えたところで結論は出ない。どこまでも生きていくしかない。まだ幼い時期は、歩いている以上は目標があるんだ、そのうちどこか目的地に着くと思っている。わたしのマルクス主義に喩えれば、共産主義ということが目標であるとするならば、資本主義が実在のときに社会主義をめざしてゆく。そういう子どもの時期の夢は、当然すぐに卒業してゆかざるをえないんですよ。六十年も歩き続ければ、目標なんか、どこにもない、死以外に待ち受けているものなんかはないということ、がわかる。目的地に永久にたどりつかないように、人生の歴史の構図はできている。どこまでも歩いていく「プロセス」があるだけなんです。そこでどういう結末があるかといえば、それがカフカの『審判』という作品です。「審判」はチェコ語でいうと「プロテス」、英語だと「プロセス」です。「訴訟」であり「追程」です。

『審判』には終わりがあります。どこで終わるかということ、ヨーゼフ・K というのが主人公の名前ですが (K というのはカフカの K です)、最後に自分も正体を知らないに二人の男にいきなり連れだされて、押さえつけられて喉をかつきられて、自分は犬ころのように恥辱の中で死んでいく。これが『審判』の最後です。まったく同時代のわたし自身が遅まきながら影響を受けたことによって、『審判』が 20 世紀のあらゆる作家たち、読者たちに決定的な影響を与えたと思わざるをえませんでした。つまり、自分がかき消されてしまうと

いうことでもって、そのことの自己証明をつくっていくこと以外に、存在証明の方法がないんです。

戦後になってオーソン・ウェルズ監督が『審判』を映画にしましたが、かれがどういうふうに 20 世紀の戦後の形象にしたかという、最後にヨーゼフ・K が殺されると、そのときにきのこ雲がパーッと広がるんです。とても印象的で今でもよく覚えています、つまりずっと殺す側の人間が生きていくんですが、最後はきのこ雲で終わるんですね。これは広島の子のこ雲です。どう思われますか？

広島・長崎である部分的経験を得て、そこから「ヒロシマ以後」という時代のカテゴリーをつくって、広島以後は終わっていないんだというふうに思って、われわれは今まで生きてきましたが、第 3 回目の広島・長崎があったらどうなりますかね？ イラク戦争で核兵器が使われるかもしれないし、北朝鮮がミサイルをぶっ放すと瀬戸際外交をやっているし、イランに懲罰するとブッシュが喚んでいるし、そこでそういうことが実際に起きたらどうなりますか？ これで人類が消滅しますから、そこには白い雲が立つだけで、それを記録する者がいませんので、これで地球文明は終わりなんです。

ですから、地球文明が終わるということは決して架空のことではなくて、蓋然性としては高いものと考えなければいけない。それを制止するためには、そういうものを制約するわれわれの〈主体〉というものが必要なわけです。ブッシュなり小泉なりをどうやって押さえるか。もっと身近な話として、たとえばゴミ処理の問題もある。水の問題もある。そのためには〈主体〉をつくっていくしかないんです。ブッシュ政権もけっこう押さえ込まれていて、持ってあと 2、3 年でしょう。そのところに希望が置けるから、わたしは 21 世紀は「希望の世紀である」と書いたわけです。ヴィトゲンシュタインとメルロ・ポンティと、どちらの方向を選択しちやいけないのか、しなければならぬのか。いろいろとヴィトゲンシュタインの提示にも何か取るところがあるんじゃないか、といったたぐいの話ではないわけです。

9 ヴィトゲンシュタインの論理破綻

さて、片桐薫さんのご質問にあった、ズラッファとヴィトゲンシュタインについてですが、二人はイギリスの大学で関係がありましたから、そこで感わされるんですが、わたしが申し上げたいのは、ズラッファはヴィトゲンシュタインに対してまったく剣もほろろであった、という事実です。こここのところを、片桐さんは軽視なさらないほうがよい、と思います。

ピエロ・ズラッファは、アントニオ・グラムシの盟友であり、わたしの尊敬している「リカード全集」をメナード・ケインズから頼まれ編集公刊した経済学者ですが、ユダヤ人であると同時に生粋のナポリナーです。これはこの本にも書きましたが、あるとき学生がかれにヴィトゲンシュタインについて尋ねました。ヴィトゲンシュタインといえば超有名人

ですから、学生としてはぜひとも話を聞きたいところです。すると、ズラッフアがどうしたかという、ナポリ人は人を小バカにするときに顎髭を撫であげる癖があるんですが、そのときズラッフアは黙ったまま顎髭を撫であげた、というエピソードがあります。これはズラッフアのヴィトゲンシュタインに対する痛烈な批判です。

本当にヴィトゲンシュタインというのはくだらない男なんですが、そのエピソードをもうひとつ。なぜかという、すくなくとも後期のヴィトゲンシュタインについて、非常に評価する人が今でも多いからです。前期のヴィトゲンシュタインの著作をみんなが評価しましたが、特に世紀末ウィーンで「論理実証主義」というものが発達して、この集団はのちにアメリカに行って非常によい仕事をするんですが、かれらはヴィトゲンシュタインの『論理哲学論考』を自分たちのバイブルとみなしていて、実証主義哲学の「ウィーン学派」をつくったわけです。しかし、わたしはこの本にも書きましたが、これはまったくの誤解なんです。実は移り気なヴィトゲンシュタイン自身ももう論理実証主義を放棄してしまっていたときに、それが誤読・誤解に基づいて「論理実証主義」のバイブルになったんです。

ヴィトゲンシュタインは何度も論理実証主義の集会に呼ばれたんですが、『論理哲学論考』が自己破綻してしまっただけでヴィトゲンシュタインは、すでに自分の「論理実証主義」は破綻してしまって、自分で自分の梯子を取り外さざるをえなかったと思ってますから、なかなか招待に応じては行かなかった。第1回目だけ無理に仲介する人がいて出かけたんですが、そこでかれはアンデルセンか何かの童話の話をして問題を逸らしてしまって、ウィーンの実証主義者集団の話の中に入ろうとしなかった。だから、ヴィトゲンシュタインの論は少なくとも論理実証主義に反するようなものではなかったのですが、ヴィトゲンシュタインの『論理哲学論考』がそのバイブルであるというのは、まったく一方的な思い入れの話です。歴史にはそういうことはよくありますけれども。

それでは、後期のヴィトゲンシュタインは何かというと、言語についてのドッジボール論です。かれは、言語というものは言表できないから沈黙しなければいけない、と割り切ったことを言ってしまって、そのこと自体の中に言語矛盾が含まれていますから、自分でも破綻してしまっただけです。それからあとは、言語はドッジボールのようなもので、言葉をやりとりするなかでその文法（グラマー）が構成されていくということを使った。これは非常に正しい命題で、片桐さんが引いてくださったノーム・チョムスキーの「生成文法」もそうですが、生得的な観念で言語があるというふうには論を立てた人は必ず、言語の文法内規則はどこから出てくるのかということにぶつかる。それは「use」からだというわけです。言語は使用（use）することによってつくられる。言語とは用いることによってその文脈ができてきて、そして文法ができて意味が出てくる。クライン以来、わたしたちはみなその考えに従っています。

そうでないかぎり、針生さんの言われたド・ソシュールの「言語批判」というのは、現代における知の出発点ですが、言語を音として見るならばまったく恣意的なもので、音と

いうのは恣意的な連合をつくって、そのどこからか意味が出てくる。たしかに、言語ははじめは意味のない音だけですが、それが使われてお互いにやりとりするなかで文法ができて、意味が形成されてくる。ですから、歴史に意味があるかどうかというのは、歴史は言語学といえるかどうか、ということですね。

歴史に意味があるかどうか、ということが、言語によってしか保証できないのなら、その言語は保証するに耐えなもいのだという「言語批判」が20世紀に出てきた。だったら歴史には意味がないじゃないか、人生や世界史にも意味がないということになってしまうわけです。ですから、これは非常に重大な問題なんです。歴史に意味があるのは言語によって意味付けられているからだということを復権させることが、20世紀にとって最大の問題なわけです。この「言語論的展開」という問題は、くりかえし申し上げるように、現代の唯一の哲学であって「現象学」に致命的な問題なのです。その過程で、およそ思想家に値する人たちは、ずいぶん悪戦苦闘してきたわけです。

また、後期ヴィトゲンシュタインの話に戻ります。言語についてヴィトゲンシュタインはドッジボール論を言って言っているんですが、かれは骨の髄まで「独我論」の人でして、自分がやっていること以外のことは信じることができないんです。これは、イギリスの哲学者でデイヴィッド・ヒュームという、われわれがたいへん尊敬している人の懐疑論に近いんです。ヒュームの懐疑論というのは、どこまで行っても疑うわけです。デカルトは、どこまでも疑えるかもしれないが、疑う自分がいるということは疑えないじゃないか、ということで、この懐疑論の問題を「方法的懐疑」に仕立てて、「身心二元論」でもって解決することで〈近代の知〉をつくった。だけど、20世紀現代ではそのデカルト的な「身心二元論」も、言語が死んでも実体の延長であるという形で身心論が分離していたのでは、世界の收拾がつかず、パンクしているわけですから、それ以前のところへ戻らなければならない。

言語のドッジボールが「独我論」ではだめだというのは、独我論は結局「我あり」だけであって、他者がいないからです。ところが、社会というものはそうではないにきまっています。自分があるということは対照性がありますよ。ということは、他者も同じように対照性を持っているということになる。自他が交通することで社会ができる、という単純明快なところに立ち戻る必要がある。自他の交通（フェケール）によって初めて社会が構成され、意味が生じてくるんです。つまり、他者というものを前提にしないような自我というものは、自我ではないんです。自他の交通がない社会の中で、幽霊的な自我というのはどうやっても生きようがないんですから。ですから、これは、ヴィトゲンシュタインという特異な人の頭の中だけにある自己妄想的仮説なんですね。

ヴィトゲンシュタインの悪口をいうときりがありませんが、かれはウィーンの大富豪の息子なんです。ほんとに途方もない大金持ちです。かれの名誉のためにいっておきますが、受け継いだ財産にはまったくかれは執着がなかった。だから中学校の先生なんかをや

って暮らしていたんですが、大金持ちの息子らしく世間のことはまったく知らなかった。政治音痴もいいところで、第 1 次世界大戦に行きって捕虜になって、収容所で『論理哲学論考』の原稿を書いて、それをバートランド・ラッセルに送って、それで『論理哲学論考』は世間に出た。最後は、ラッセルはヴィトゲンシュタインに手ひどく裏切られるんですけども、ラッセルはヴィトゲンシュタインと付き合ったために、論理学から哲学のほうに行ってしまった。それから哲学もやめてしまって政治の方へと、どんどん行ってしましまして、最後は運命論者になり、アインシュタインさんと一緒に核兵器廃絶運動なんかをやって、一生を終わっちゃたんですね。ヴィトゲンシュタインのおかげで、偉大な人物のラッセルは人生のコースを逸らされてしまった、と言えます。

「独我論」の話に戻りますが、相手がいて会話が通じるからその中で言語のドッジボールができるんです。ヴィトゲンシュタインの場合は、自分の頭の中で言語のドッジボールだっただけで、実際にはかれの相手がいないんです。だから、ヴィトゲンシュタインのボールは、どこまで行っても競技場に転がったきりです。転がっているだけで使えないですから、文法も意味も生じない。これで終わりなんです。それはよく「チェス」のことも例に出しますが、このプレイでも指す相手が居なければ、駒も動きようがない。同じことです。

後期のヴィトゲンシュタインは「独我論」を脱して「言語ゲーム論」になりました、と。言語ゲームないしは言語プレイは、非常に精妙な言語批判をするわけです。しかし、後期ヴィトゲンシュタインの場合には見えそうに見えてもけっしてけしてそうじゃない。かれの本質である「独我論」では、どこまでいっても意味が生じない。それはつまり、一人遊びですよ。そういう一人遊びになってしまっていて、そして最後には、対象世界は全部消えてしまおうし、自分も消えてしまっていて、それで終わりになる。前期の『論理哲学論考』と同じことで、結局は最後には、自分が自分の昇ってきた梯子を外してしまう。たいへんな空中曲芸ですが、上空に自分で自分の梯子を外してしまったら、どうなりますか？墜落死亡をとげる以外にないですよ。ですからわたしは、20 世紀的現代で最大の流行思想であるヴィトゲンシュタイン思想は、自己墜落思想だと評するのです。

実際、晩年のヴィトゲンシュタインは、自分の「言語ゲーム論」にもかかわらず、それも成り立たなくなってしまうものですから、最後には自分の原稿を焼き捨てるようにお釈迦さんに命じて学問的生命を自ら絶ってしまいます。死ぬ前の晩まで、消したり書いたり消したり書いたりして、そのことで悩んでいた。最期はほとんど発狂死じゃないですかね。毎回、自分の論が立てるそばから足元から崩れていく。結局最後は、その問題を自分で解けないで、投げ出して死んでしまった。わたしは、ヴィトゲンシュタインの方向には現代哲学の出路をとうとう感じることはできませんでした。このことはわたしなりに

この本の第一巻で細かく書きましたので、皆さんどうぞ読んでください。あれだけ欧米で流行したのに、そこには何もないんだということが、おわかりいただけだと思います。わたしは一周遅れでこれから日本でヴィトゲンシュタイン・ブームを起こさないように、願っています。

10 見えないものの言表化

それでは、メルロ・ポンティの方向性のほうに、話を引き戻したいと思います。

メルロ・ポンティの『見えるものと見えないもの』は、戦後哲学で最大のものですから、ぜひ読んでいただきたいのですが、古典古代ギリシア文明のように「見えるものの文明」ではない、意識と下意識、意識と無意識なら、無意識のほうが世界との認識において占める割合が大きいということですね。これは、シグモンド・フロイトという精神分析医が言っていたことですが、わたしは非常に真理だと思います。意識の下には、歴大な無意識の層がある。

無意識だから無規則・無法則かという、そうではない。無意識ほど、フロイトはそれを精神分析において言語化したわけですが、フロイトが病者を治すことができたのはそのためです。無意識の世界にその人の幼児のころの傷（トラウマ）があつて、そのためにヒステリーなどのトラブルが起きてくる。そのことが言語化されて解けた場合に、無意識界のことが構造化される。これによってその病者は治るんです。この無意識の分析領域は、精神分析としてはジャック・ラカンが開拓して発展させましたが、もっと広く、いわゆる「構造主義」という形で、人間的自己了解の問題としてレヴィ・ストロースが親族や神話の分析として方法化した。わたしはマルクスの「経済学批判」とフロイトの「精神分析」とレヴィ・ストロースの「神話分析」は、同じ本質をもっている、社会の無意識の領域の法則的探求である、と知っている。

精神分析に対しては、スターリン主義としてのマルクス主義が非常に敵視していた時期があつたんですが、フロイトの精神分析は、わたしに言わせれば、マルクスの経済学批判とまったく同じ言語論的な方法論をとっている。いわゆる物象化論ですね。それは無意識界をいかに言表化を通して構造化できるか、ということなのですが、その場合は、無意識界のいうのは或る種の厳密な構造域の法則性に則っているんだ、ということがわかってきて、意識界での構造化よりももっと深いところで構造の規則性を現わすということですが、これはマルクスが資本主義の分析で言っていることとまったく同じなんです。つまり、資本家が自分の利潤欲望を追求して、自由意思に基づいて「諸資本の自由競争」を通じてやっていることが、無意識的な構造化となって資本主義の法則性として現われる、それは資本家＝ブルジョアジーにも強制的な法則として拘束することとなる、ということ、を、『資本論』で分析して見せた。その端的な現われが、〈恐慌〉です。わたしが近刊する『恐慌論』

をぜひお読みください。

資本とは何であるか、ということを一言で答えるということ、何度も試みた人がおりますが、わたしはそんなことはできないと思います。資本主義とはなんぞや、と問う朴念仁がいたら、マルクスはきっと『資本論』全 3 巻を読んでくれというでしょう。それくらい『資本論』は解析しきって、しかもそれを方法論的に完全に意識化しているんです。だけど、資本家にとっては、解析の必要はないんです。利潤を追求するという自分の自由動機にしたがってやっているだけのことです。つまり、無意識でやっていることが、そういう法則性であるということは、マルクスが対象を分析することによって明らかにした「物象化論」の心髄ですね。

つまり、ヴィトゲンシュタインは先に「見えないもの」に注目するんですが、「見えないもの」を浮上させる原理の作用については、沈黙する以外にないとして、その言表を拒否してしまいますから、そこから先は前には一歩も進めなくなってしまいます。つまり、浮上させる術をもたない。ゆえに、メルロ・ポンティ的な立場でいえば、「見えないもの」の言表による構造化こそが、20 世紀の現象学だということになります。それが〈主体〉の再生の端緒である、とわたしは思います。

11 価値の転換—ニーチェとフーコー

その先の問題で、もう少しお話しします。ひとつは、わたしの本の第一巻で採っているミッシェル・フーコーのことです。フーコーの問題は、メルロ・ポンティの問題と同じくらいに大事です。どういうことかといいますと、20 世紀的な現代の認識はどこから始まったかという、それはいうまでもなく、フリードリヒ・ニーチェからなんです。ニーチェは 20 世紀の頭のところで死んだ人ですが、そのかれが 20 世紀の運命を予言しました。そのあとに続くのが、わたしに言わせればフーコーです。

『悲劇の誕生』を読まればわかると思いますが、ニーチェはもともと卓越したギリシア学者で、古典古代ギリシアについての専門家でした。かれほどギリシアをよく知っていた学者はいない、とわたしなどはと思いますが、他のギリシア学者はかれを小バカにしていました。要するに皆、ギリシア一辺倒ななかで、ニーチェだけは批判的な目を持っていたということです。

どういうことかという、ニーチェは、ギリシア文明は本当は目の文明ではなくて、音楽（ミューサイ）の文明だというんです。古典古代ギリシアの表現様式に即していえば、「音楽の精神」や「悲劇の誕生」によって確立された文明なんだというわけです。悲劇が悲劇たる特性はどこにあるかという、その本分がそれまでのギリシア文明の本分といわれているアポロンではなくて、ディオニューソスにあるところにある、と。ディオニューソスというのは、いうまでもなく、葡萄酒で酔っぱらって女と一緒に山野を荒れ狂っている神様です。

これまで古典古代ギリシア文明は「見える文明」「ヌース（叡智）の文明」とされてきましたが、研究が進めば進むほどそんなことはインチキなギリシア学者のいつていることがわかってきます。古代ギリシア文明は、奴隷制文明ですが、これはつまり家父長的で、今と同じ男権文明です。そこには半分女性がいるわけですが、驚くべきことにポリス国家においては女性は市民ではありません。奴隷以下の存在なんです。地中海の母系制文明がエンゲルスのいう世界史的な敗北を被って、ギリシア文明になったわけです。それ以前の母権制の地中海文明を保持しているのは、アテネの一般家庭にいる女性たちなんです。

フェミニズムの問題を考えるとわかりますが、それは人類文明にとって重荷になっている、つまりいまだに解けていないんですね。障害物になっている。古代アテナイに即して解けていないものがあると、どうなるかという、冬の寒いとある時期に突如としてディオニューソスの呼ばれる声が聞こえるんです。これは共同幻想・共同幻聴ですから、一斉にアテネの女の人の耳に届きます。すると、亭主と家族を打ち捨てて、アテネ中の女たちが全部原野に走るんです。そこで女だけで、跳ねたり踊ったりして、出くわしたものは片っ端から殺してむさぼり食ってしまう。自分の子供も殺してしまうし、雄牛なども打ち殺して生肉を食らう。これが「ヌースの文明」といわれたポリス国家の実態だったわけです。そうやってやっと蘇生をして、女たちはまたポリス国家のアテネの都へと戻ってくる。

ですから、ニーチェが洞察したことはまったく正しいわけで、ディオニューソスの「酔っぱらいの文明」「舞踏の文明」によって絶えず活性化させられることで、ようやく文明として蘇生しているというのが、この古代ギリシア文明の本質なんです。そういうところに着目したことが、ニーチェの偉大なところで、古典古代ギリシア文明以来の価値の転換をしなければ人類は滅びてしまうと思ったわけです。実際にそのとおりになっていますから、ニーチェが「神は死んだ」という言葉に託した重い意味がそこにある、と思います。

そこからわたしがどこに話をつなげたいかという、第二次世界大戦後にニーチェに続く重大な問題として、ミシェル・フーコーによって「人間は死んだ」として人間の死亡宣告が出されたことに注目したい。『監獄の誕生』とかはフーコー研究者によって珍重されていますが、これはわたしからみれば大したことはありません。これは前期フーコーの「パプティコン」でありまして、監房がそれを一望しているどこかから見られることによって、すべてを支配される、という仕組みです。

戦後の資本主義支配にはそういうところが一時期ありましたが、戦後資本主義の高度成長によって消費文明が出てきてからあとの今日の高度資本主義文明には、そんなものはもうないですね。われわれは、誰からも管理されずに自由だと錯覚しながら、消費して暮らしているわけですが、そういうなかでいかにしてわたしたちが資本によって操作されているかということがあります。これは「パプティコン」の監視の文明ではないんです。管理文明です。

後期のフーコーは、「性の欲望」というところから読み解いていこうと試みています。かれの『性の歴史』は四巻ありますが、「性の欲望」をキーワードとして解いていく。そして

その中でしか資本制文明に批判的に分析されない。人間は欲望に従って生きている。人間は完全に終焉した。非常に美しい言葉ですが、渚のほとりに人間の死体が横たわっているということの確認からしか、われわれはこれからは存在しない、とフーコーは言います。これはニーチェの「神の死」にひきつづく「人間の死」として、画期的なことです。わたしの言葉でいえば、〈主体〉はグローバル資本主義のなかで死にました、と。お互いにそのことを確認してから、再出発しようということです。

フーコーは〈主体〉が死んだということを宣告して、それを放り投げたままあの世に行ってしまう、われわれには絶望だけを残していったわけです。しかしかれは、『性の歴史』の最後のところでもう一度〈主体〉の再生をしなければならない、と言って〈主体〉の悦楽というところから問題を解いていこうとします。それはつまり、高度消費文明に回収されないような性の欲望、人間の欲望の根元のところに、どういう前に進むモチーフがあるのかということから、問題を再建しようとしたわけです。

ですから、フーコーは、メルロ・ポンティと別な意味で〈主体〉が壊滅したと思われるところから再出発して〈主体〉の再生を志して、それをわれわれに託して死んだのだと思います。わたしたちはメルロ・ポンティとフーコーが残していった課題を解かなければならないのです。〈主体〉再生の問題はもうないんだと思っている人たちに、わたしなりに警鐘を鳴らしたい。〈主体〉再生の問題はまだ根本問題として現存しているんで。何度も繰り返しますが、それはロマン・インガルデンの問題意識とひとつのことなのだ、と思います。

この3巻本では、第I巻では今いったような、現代思想の第一線でどのような問題が提出されていて、それらが解けているかのごとくわたしたちはごまかして生きているが、しかしまだその核心問題が解けていないし、それを解けなければこの世は終わりですよ、ということをおわたしは言いたいわけです。だいたい第二次世界大戦後の思想的問題状況、われわれのごく身近なところに凝縮されている問題を取り上げています。第II巻、III巻は、8000年の人類文明史についてですが、その8000年の歴史と、ここわずか50~60年くらいのエッセンスとが、どういう対応関係あるのかということが、この本のいちばん大事な点です。わたしはそれについてはある程度見当をつけたつもりですけど、本当にその対応関係が歴史編と思想編という形で巧くついているかどうかは、十二分な自信はありません。

ただひとつ確信を持っているのは、戦後六十年というところに凝縮されている、メルロ・ポンティ vs ヴィトゲンシュタインという現代思想の第一線の問題の決定的意義についてです。古典古代ギリシア文明の延長上に現代の西洋中心主義の世界があるわけですから、それはギリシア・ローマ文明に対するニーチェの批判の域をも超えて、もっと遡源して、地中海世界の生い立ちのところから人類文明史を見直しいかなければならない。

西洋中心主義の世界とは、言い換えれば、可視的でヌース（叡智）がすべてを支配できると信じた合理主義的な文明です。その文明が世界合理化とその極での世界の非合理化、というマックス・ウェーバー的問題として今日では露呈してきた。つまり、現代合理主義文明はもう破産した、という立場に立って、今日のわたしたちはこの致命的問題を解かな

ければならない。そのためには、8000 年前の地中海文明、つまり古典古代ギリシア文明、奴隷制文明が出てくる以前の、何らかの意味で家産制的で母権的で貢納制的な原初の文明の抱えていた問題点に戻らなければいけない、ということも含まれるのです。

この研究会の 2 回目以降は歴史編に入ります。人類文明史というのは、8000 年前の地中海世界史以降を言いますが、人類史の最初というのは、いわゆる原始共産制社会ですから、そこからすると、ヘロドトス以前の歴史は或る種の逸脱なんです。貢納制から奴隷制へと、そしてオリエントからオクシデントへと、世界史が逸脱してから 2500～2600 年たったわけで、今ようやくまたその世界史的逸脱を許す大転換期がきている。

資本主義社会になって、ゲマインシャフトの社会ではなくゲゼルシャフトの社会になってから、わずか 500 年だけの話ですから、8000 年の歴史から見ればまったく一つのエピソードです。こんな奇々怪々なゲゼルシャフトの歴史なんて、本来の人類文明にはないんです。これはあと 2、3 年で終わりです、と。これから後はまたゲマインシャフトの社会になる。義理と人情のわかりやすい世界ですね。歴史編では、折り目折り目でそういうところに触れていきたいと思います。

今日のグローバリゼーションによって剥奪された〈主体〉を再生する用意ができていなければ、どんなに最前目に見ても人類文明史は、これで終わりです。ジタバタしてもだめなんで、以て瞑すべしです。でも、あまり悟りきったことを言うのも嘘っぽいですから、わたしなんかは定めし最後はギャーッとかチキシヨウメとか言いながら死んでいくと思いますけど（笑）。

だいぶ長くなりましたけれど、これに懲りずに第 2 回もお付き合いください。どうぞよろしく願いいたします。

討論

猪野修治 いいださんの講演は、パネラーである片桐薫さんと針生一郎さんのご質問に沿った明快なリプライでした。これに対してパネラーの方から、さらにおっしゃりたいことがあればお願いいたします。

針生一郎 ヴィトゲンシュタインについては、わたしはあまり知らないのですが、いいださんが書かれたことを読んで、また特に先ほどの、社会との関係を切り捨てた或る種の自我論で言語というものをとらえられるわけがないという話を聞いて、思い出したのは、ヴィトゲンシュタインとは吉本隆明そのものだなということです（笑）。吉本氏のほうがわたしより 1 つ年上で、ほとんど同世代ですので、初期にはかなり共感もしていて、かれは『言語にとって美とは何か』を、マルクス主義にも表現論が必要だという考えで書いたという

ことですが、その意図には賛成だった。わたし自身もそんなふうに思っていました。

その本は、時枝誠記さんの言語学を手がかりとしているんですが、ソシュールの言語記号でデノタシオンとコノタシオンというがありまして、デノタシオンとは指し示すことで、対象となる言語の一つの観念を指示する作用があります。コノタシオンとは、何か対象を示さなくても、記号としての言語が持っている表情のようなもので 或る感情や意思を伝えること、普通は「含意」という日本語にしていると思いますが、それが吉本氏の『言語にとって美とは何か』では「指示表出」と「含意表出」となっている。

つまり、表出至上主義になっている。そして、言語の究極は動物の“叫び”のようなもので、本能的に深いところから出てくるもので意味が伝わらなくてもいいとしている。それを読んでわたしはまったく失望して、これではマルクス主義ではなくなるし、かれは理論的なものはだめだなどと思いました。しかし世間的には60年安保闘争の直後だったこともあって、この本は学生に非常に受け入れられて、テクニカル・タームを口まねするような者も多かった。

あの当時、わたしは「第3次政治と文学論争」でかれと論争していて、そのさなかでもわたしが文学学校の教務主任だったこともあって、かれに講義を頼むと、来てくれる。帰りにわたしが一緒に並んで駅まで行くと、論敵とは私語を交わさないという意志を示すために、夜の9時過ぎで真っ暗で読めないのに、岩波文庫か何かを目の前に差し出して歩いているという状態でした(笑)。その吉本くんが、娘たちの影響なんだそうだけれども、『マス・イメージ論』を書いてから、マスコミで取り上げられているものは皆それなりに大衆の指示がある、意味があるんだというふうに変わってきた。かれ自身がコムデ・ギャルソンなんかを着て、或るところで会ったら、かなり遠くから「やあしばらく。お変わりないですか？ お変わりないですね」なんて話しかけてきて、変われば変わるものだと思いますが、独我論のところはあまり変わっていないんじゃないかなと思います。そんなことを思い出しましたので、補足いたします。

片桐 薫 ヴィトゲンシュタインは、いいださんに言わせればくだらない男で、理論的にもだめなんだということですが、そのことはわたしも本を読ませていただいてよくわかったんですが、わたしがお聞きしたかったのは、いいださんも尊敬しておられるブلافアが、なぜ十何年間も毎週木曜日にヴィトゲンシュタインに付き合っていたのか。またウィーンにヒトラーが入城するがどうすればいいかと聞かれて、適切な答えをしてやっている。それは何故なのかということです。もうひとつは、グラムシの最後の「ノート」29ですが、これは反ヴィトゲンシュタイン論ではないか、ということを上げかけたかった。

これらのことについては、先ほどの休憩時間にいいださんとお話ししてもう済んでしまいましたし、リプライでも答えていただきましたので、これ以上は特にございません。

猪野修治 それでは、今度は、会場からのご発言をお願いいたします。

中山 中山茂と申します。科学史家です。先ほどのいいださんのお話の中で、これからヴィトゲンシュタインは流行るとおっしゃったのが、ぼくにはよくわからなかったのです。ヴィトゲンシュタインの伝記なんかはいくつか出ていますが、それは非常に面白い。奇行というのか、ちょっと普通の人と価値観が違う人で、例えば小学校の先生のほうが大学の教授よりもいい仕事だと思っていて、まじめにやりすぎて、子供を殴ってしまって追い出されたなんていうエピソードがあります。しかし、かれの論が始めになったという「論理実証主義」なんてこれから流行るのかしらという気がします。

戦後、「実存主義」と「マルクス主義」と「論理実証主義」の3つが日本に入ってきましたが、論理実証主義はいちばん面白くなかった。ぼくら理科系の者にとっては、あんなもの当たり前ことでバカバカしい。それが戦後のアメリカ哲学界でヘゲモニーを持ったというのは、それをやらないと、マッカーシーのレッド・ページに引っ掛かるからなんです。最後にはシンボリック・ロジックが出てくる。要するに、「論理実証主義」を戦前の連中がありがたがったのは、対抗馬としてナチス科学があったり、唯物弁証論があったりして、その中から純粋な西洋の伝統を守ろうというようなところがあって、それはアメリカ哲学界はもとより、左翼にも、バナールやニーダムのような連中にも、それからロバートソンのような社会学者にもみんなありました。ぼくらの世代は、そういうふうに感じます。

ぼくの師匠だったトーマス・クーンなんかは、ぼくより六つくらい上ですけども、かれらも戦争末期に動員に引っ張りだされて、それから最後に原爆をつくったりしたわけですけども、そうなるともう守るべきものという感覚はないわけですよ。だから、その中心にあった「論理実証主義」がありがたいものだという感じはしないんです。そういう論がこれから日本で流行るようになるというのはどういうことか、と思ったのですが。

いいだもも 中山茂さんはわたしの長年の友人ですが、今回もわざわざ御出席と御討論をいただいて、ありがとうございます。中山さんはどなたもご承知のごとく、トーマス・クーンの『科学革命の構造（科学パラダイム論）』を正確な日本語に翻訳して紹介し、その意義を敷衍した日本で最初の方です。戦後のいわゆる科学的思考のパラダイム・チェンジでは、中山さんが師事したクーンのパラダイム論は、非常に大事なんですね。

普遍的な時間的過程でいうと、科学というのはいつもなだらかに平和的進化しつづけるようなものであるということ、実はその中にいわば通常科学の時代と革命的科学の時代があって、革命的科学というパラダイム・チェンジを大きくやってこれまでの科学通念をぶっ壊したから、前進をとげてきているのが実情である。そのあとに違った高いレベルで新たな通常科学がずっとなだらかに続く。わたしは、まさにそのとおりで思って中山翻訳を読みましたが、日本の科学者自身にとってそのことが生産的に使われていないということは、非常におかしなことだと思います。わたしはなにせ革命家のはしけれとして戦後六十年間やってきていますが、トーマス・クーン＝中山茂の「科学革命」派一番ピタリとき

ます（笑）。

中山さんはおっしゃいませんが、世界の科学史にとっても日本の科学史にとっても、ニーダムの仕事を包括して超えるような仕事が、これからも中山さんのお仕事としてをどんどん出てくるとは思いますけど、科学というのはそういうものなんで、その科学についても物の考え方は、今日お話しした思想についてのわたしの考え方と非常に密接に関係してるので、とても大事だなと思います。

それから「論理実証主義」については、これから日本で流行るということではなくて、欧米ではかつてヴィトゲンシュタインが大流行して、現在でも流行ってますよ、ということと言いたかったんで、中山さんのアメリカ哲学に対する評価については、わたしもだいたい同感です。ただ、アメリカ哲学にも素晴らしいところはあり、それはやはりジェームズとデューイの「プラグマティズム」の普遍性ですね。

プラグマティズムに影響されたといえば、例えばわたしの何人かの師匠のうちの偉大な一人である鶴見俊輔さんがそうですが、鶴見さんの骨格をつくっているのはプラグマティズムであることははっきりしています。こういう思想がこれから日本に普及して根付くかどうかということは、プラグマティズムの戦後の受け入れ方に関係すると思います。

これもまた、わたしたち左翼とのあいだには長い歴史があって、ジェームソンがスターリン主義としての自称左翼からさんざんやられたときの憤りに似たものがいまだに残念ながら残っていると思います。

戦後すぐのときの日本のマルクス主義哲学者は、わたしの師匠である梅本克己などを除けば、反代々木派の唯物論哲学者であっても、鶴見俊輔はアメリカ帰りでプラグマティズムであった、だから、「思想の科学」はプラグマティズムだ、これはマルクス主義的左翼にとっては最大の敵である、という論理でした。今でもわたしと一緒に仕事をしている大阪の哲学の巨匠、山本晴義さんは、若いときはその先頭に立って、アメリカ・プラグマティズムを現代イデオロギーの代表として徹底的に批判していました。今は自己批判してその不毛な批判は止めてしまいましたが、鶴見さんの方は批判を止めてからの山本さんとは付き合いがないから、山本氏はあの時こんなことを言ったけれどそのあと近頃は何をやってるんだと、ときどき聞かれます、困りますよ（笑）。当然、ジェームソンと同じことでこだわりは残りますよ。

ですから、プラグマティズムに関しては、われわれマルクス主義者は必ずしもいい役割を果たしていなかった。現在的には、それはスターリン主義の問題だということは、山本晴義さんもふくめてわたしたち自身の問題としてはっきりしています。スターリン主義にはそういう思考方法であるといえる、と思います。

中山 茂 いいださんは今回この 3 巻本を書き上げましたが、どうですか、死ぬまで書き続けませんか（笑）。先ほど話が出たニーダムも『中国の科学と文明』という大著を書いている途中で亡くなりました。翻訳は十何冊出てます。

僕がニーダムに会ったときに言ったのは、あなたは計画がどんどん広がって行って永久に済みそうもない。だから済ませなくてもいいんじゃないか。ずっと未完成交響曲を奏でていれば長生きできてよろしい、と（笑）。すると、かれも、そう思う、といった。自分は道教の徒だから終わるか終わらないかなんて考えない、と（笑）。だから110歳くらいは生きると思っていたんですが、パーキンソン氏病に罹って、94歳で死んでしまったんです。ぼくはかれの仕事の続きを日本でやろうと思ひまして、その話をぼくの主治医だった川上武にしましたら、そういうのをずいぶん見てきてるけれども、みんな最後まで完成しない、死ぬときはみんな往生際が悪く非常に苦しむ、あういうのは見ちゃおられないから、早く仕事をまとめて心安らかに死んでくれ、といわれました（笑）。医者としてはもっともな意見だと思います。でも、医者の方のことなど気にせずに、「生ける験」として書き続けてください。あの調子で書くと、これから十数冊書かないと、完結しないはずですよ。それから自伝も書いてください。

それで、いいださんにこれから先、自伝も含めてずっと書いてもらえないかなと思うのは、テッサ・モリス・鈴木というイギリス人の女性がいますが、彼女が昭和に生きた三人の人物の半生記を書いていて、その一人がいいだももなんです。それを読むと他にもいろいろと知りたくなりますので、やはりご自身が書いて残してほしい、と思います。

いいだもも テッサは私のところに2回くらい取材で来ていました。だから日本語で書いたんですよ。当時無名の若者に毛の生えたものでしかなかったわたしを、かのじよは「昭和期を代表する日本の三人の大思想家の一人がいいだももです」と、本当に書いているんですが、別に恋人関係でも何でもありませんが（笑）、本当にかのじよはどう勘違いをしたんですかね（笑）。

白鳥紀一 この本のボリュームと今のお話に圧倒されて、自分より一回り上の先輩がどうしてこんなに元気なのかと思って、何も申し上げる気力がない、というのが本音です。でも最後の方のお話は、物理屋としても関心があります。いろいろないい方が出来ると思いますが、主観主義というか、自分の外に世界が見えない、ということだと思ふんです。

たとえば、この頃プロ野球で打者走者が一塁に滑り込みますね。滑ると抵抗が大きいのですぐ止まります。他の塁だとタッチプレイですからタッチを避ける意味もあるけれども、その塁に止まらなければならないという制約があるから、滑り込みは理にかなっています。一塁ではそうではないので、走り抜ける方が早い。大リーグでは滑りこまないそうです。あれは、早く一塁につきたいという意志の表明をしているので、客観的に早くつく努力をしているわけではないのですね。それが受ける。そういえば、この頃は球場全体が次の一球を息を呑んで見守る、といった風景はなくなりました。観客は観客で騒いでいる。プロ野球としては勝ち負けよりも観客の喝采を受ける方がいい、というのはあり得るわけですが、本当にどうかよりもどう思われるかの方が大事だということになると、物理は出来な

くなります。政治もそうでしょう。必勝の信念を頼りに戦争をすれば負けます。それでも、戦争をして相手をやっつけようとあおる方が、負けるまでは人気を集める。この頃がそうですし、戦前もそうだったんでしょう。武谷三男さんが「自由とは必然性の洞察である」とヘーゲルを振り回したのも、主観主義が気に入らなかったからではないでしょうか。

一塁ベースの滑り込みは、大学一年の力学の試験に出したことがあるんです。答はほぼ半々でした。その中に、物理学はわからないけれど中学以来野球をやって来た経験からいって、絶対走り抜ける方が早い、という答案があって、これは物理としてはいいんだけど、物理学の答案としてどういう点をつけるべきか、大分迷いました。

外の世界、自分たちがどう思うかとは独立な世界があるのでなければ力比で、力の強い奴のいうことが通ることになります。こっちに物理的な力がないときに、それを止めさせるにはどうしたらいいか。まあそれは、実際にやってしくじってみるしかないんでしょうね。上でいった野球部の学生のように。そうすると、世界は滅びるしかない、といういいださんの話にあってしまうんですが、失敗してからその先に、もう一度やってみるチャンスがないと困る、という気もするんです。

もう一つ気になっているのは、この主観主義の瀰漫というのが系譜的には「70年」につながっていると思われることです。吉本隆明の話も出ましたが、これは70年の運動と敗北の質につながるのではないかと。これはどうも大変に辛いのですけれども。

いいだもも つまんないよね、折角、身養生して胃癌だというのに八十二歳でこうやって頑張ってきたというのに、ほんとうに今度はもう一度やれるチャンスはないんだから（笑）。さっきの針生一郎さんの吉本隆明論はすごく面白いので、何かそれに書かれたほうがいいと思うんですよ。わたしも実はまったく同感で、本人がいない席で言うのは良くない面もあるとも思うけれども、針生さんのおっしゃるとおり、吉本氏の『言語にとって美とは何か』は「表出」の一点張りなんです。わたしに言わせれば、表現論と意味論がないんです。そんなことで、言語にとって美とは何か言えるはずがない。言えそうに見えるのは、言語にとって詩とは何であるか、意味があるのかのみであり、美であるから、それは先ほどの白鳥さんの発言でいえば「主観的情緒」の問題ですから（実際には速く滑り込めなくても、そのほうが速いと思っている）。言語論一般にとっては、そんなことは表現にも意味にもならない、と思うんです。

どうして「表出」の一点張りではだめかという、針生さんの巧みな比喻でいうと、吉本氏は人間の言語というのは動物の叫びと同じだと、実際に言っている。つまり、小鳥がチッチと鳴いているのと同じだということです。動物の鳴き声や叫び声も確かに「表出」ですが、それは人間の言語の表現・表出とはまったく別のものでおることは自明なことです。人間と動物をどこで分けるかという、人間は言語を語っているのであって、動物は永久に言語は語ることはできない。どこで人間と動物を分ける必要があるかということがわからなくなると、動物も人間も同じように叫ぶから表出であって、表出論でやれるとい

うことになってしま識別がないんですよ。「万里の長城」の概念分割がない。

針生さんの状況論的な説明を聞いてなるほどと思いましたが、いかに60年安保が敗北とに終わったからといって、あそこで三べん国会を回っただけで挫折してしまったと称するのもよほどチンケな学生なんだろうけれど、そういう状況だからだといって「派」を唱えるのはどうも解せないところがあります。そういうチンケな連中を相手に商売してみたって、どうということにはなりっこない。言葉の正当性のためにも、天下国家のためにも、そういうくだらない話は一日も早く、針生さんによって一鉄槌を食らったほうがいいんじゃないか、と思いました。便乗の言です。

猪野修治 ありがとうございます。今日の大先輩方のお話をお聞きしながら、わたしはなんと贅沢な立場にいるんだろうと思いました。連休の最終日にたくさんの方にもお出かけいただきまして、本当にありがとうございました。最初に申し上げましたように、湘南科学史懇話会も九年目に入りましたが、四回連続でやるというのは初めての試みです。この先どうなるのかわかりませんが、書物を繙きながらひとつひとつ勉強させていただきたい、と思います。できれば最後までご参加ください。また宣伝もよろしくお願いたします。(終)